

人文会ニュース

2005.4

巻頭エッセー 鷗外の軍事用語	半藤一利	1
書店現場から 本とともに過ごす「時間」	徳永圭子	4
わが赴くは本の群れ	中藤龍一郎	6
人文会特別講演 がんばれ！ 日本の図書館	斎藤明彦	11
開かれた〈人文書〉へ ——リブロ池袋店人文会フェア関連企画トーク・セッション報告	西谷能英	47
人文会・中国視察旅行 「北京・上海からニーハオ」	藤代俊久・馬場正彦	51
平成16年度上半期 人文会活動報告	新保卓夫	55

証言のポリティクス

高橋哲哉著
NHK番組改変問題が
わかる一冊!

問題番組の出演者・高橋哲哉氏による
番組改悪過程の記録「何が直前に消
されたか—NHK「問われる戦時性暴力」改
変を考える」を収録。 2310円

アメリカという記憶

ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象
M・スターケン著 岩崎稔ほか訳 3990円
アメリカ社会にトラウマを残した出来事は、
どのように記憶され表象されたのか。

★各紙誌にて好評!

木下直之氏・生井英考氏・小林憲二氏
笠原美智子氏ほか、書評続々。

未来社

※価格は税込

東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel.03-3814-5521 <http://www.miraisha.co.jp>

寺田寅彦と現代

等身大の科学をもとめて
池内了 地震災害や複雑系科学への洞察から映画・連句まで。
没後七〇周年、その全貌を照射した本格的書き下し。 三三〇円

斬首の光景

クリステヴァ あらゆるイメージの起源に存在する、切断さ
れた首のヴィジョン。その謎に迫る。星野、塚本訳 四二〇円

丸山眞男との対話

石田雄 (他者感覚)の重要性を訴えた「丸山眞男との未完の
対話を持統するために」はじめ全13編 証言と批評。 三六〇円

理性の使用

ひとはいかにして市民となるのか
富永茂樹 フランス革命期における社会の衰退と議論の悪夢
を、高い学問水準で批評する。政治哲学の快著登場。 三九〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷 5-32-21 <http://www.msyz.co.jp>

戦国武将・合戦事典

峰岸純夫・片桐昭彦編
戦国乱世を読み解く、武将・氏族・合戦の計一〇六三項目を三
編に分け解説。肖像・花押・合戦図屏風などを多数掲載し、読
むほどに興味が広がる入門書としても最適な本格的な事
典。ユニークな在世家表・便利な索引付。『内容案内』送呈

事典 日本の名僧

日本史上に登場する一八〇人の名僧・高僧・政僧を没年順に収
載し、平易に解説する。主要な著作・典籍・宗派・信仰や、肖像
画も多数掲載。巻末に主要名僧在世家表、仏教関係年表、宗派
系統図、索引を付載した決定版。四九六頁 『内容案内』送呈

吉川弘文館

価格
税込

東京都文京区本郷 7-2 / 電話 03-3813-9151

ミネルヴァ書房

《ミネルヴァ日本評伝選》

第Ⅱ期

二代目市川團十郎

田口章子 ● 役者の氏神 江戸歌舞伎の礎を
築いた役者の生涯を描く。 二五二〇円

忍 性 慈悲二過ギタ 松尾剛次 2520

満 濟 天下の義者、公方ことに御周章 森茂晩 2625

井上有一 書は万人の芸術である 海上雅臣 2835

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町 1
TEL 075-581-0296 宅配可 / 価格は税込

鷗外の軍事用語

半藤 一利

寺子屋式の授業をまとめてもらった『昭和史』（平凡社）が好評で迎えられたお蔭で、物識りの隠居と思われるか、やたらに昭和史関係の質問を受けることが多くなった。先日日本陸軍の『作戰要務令』について聞かれた。「ウム、これはな、昭和十三年に制定されたもので、陣中勤務および諸兵連合の戦闘についての基本事項が書かれておる。すなわち攻勢第一主義なんであるな」とお茶を濁して、あとはムニヤムニヤと誤魔化した。これを契機に調べてみて、これが大正十三年『陣中要務令』と昭和四年『戦闘綱要』とを併せたものとわかった。が、ここで書きたいのはむしろ国語の問題。ともあれ、第二編「攻撃」の一部を引用してみるのが手っとり早い。

「夜暗ヲ利用シ敵ニ近接シテ攻撃準備ノ位置ニ就キ払暁ヨリ攻撃ヲ実行スルヲ有利トスルコト屢々ナリ」（第百二十五）

「払暁ヨリ攻撃スルニ方リ攻撃準備ノ位置ヲ敵前至近ノ距離ニ設ケ黎明ヲ利用シ突撃ヲ行フコトアリ」（第百二十六）

「払暁（黎明）ヨリ攻撃スルヲ為攻撃準備ノ位置ヲ占領セントスルトキ……」（第百二十八）

わたくしは思わず「ウム」と唸ったのは、ごくふつうに、ごく同じような意味で使っている言葉の「払暁」と「黎明」とが、厳密に区別されて用いられているということ、かつ払暁を黎明よりも先行させている事実である。これはなかなか興味深い。払暁は、攻撃するを有利とすることはあるけれども、まだ夜が暗いのを利用して敵に近接し攻撃準備を完整させるほうがより有利と、準備を優先させている。準備を十分に整え、そして黎明を期して突撃を敢行する。つまり、太陽の光をみてはじめて突撃であり、まだ明けやらぬ薄暗い払暁には、攻撃することはあっても、突撃はしないの

[illegible]

である。

詩歌や小説では、おそらくそれほど厳密にわけて使われているとは思えない。詩語としてはどちらもなかなか美しい。しかし、軍用語となると、どちらでもいいというわけにはいかない。実戦では言葉の意味をきびしく規定しておくことは必要かつ不可欠である。ましてや時季によつて日の出の時刻が変わる。そこで、払暁と黎明と、その微妙な差をきちんとさせているところ、ハハーン、なるほどな、と大いに感じいった。

ところで、軍事用語から思い浮かぶのは陸軍軍医監監（中將）であつた鷗外森林太郎。この人はさすがにプロらしくうまくこれを使っている。たとえば、軍とおよそ無縁な小説『雁』に、妙なところでそれが飛び出してくる。高利貸しの末造の商売の話で、根津の住居の近所に事務所、龍泉寺町に出張所をつくつた、というくだりである。

「根津で金のいるものは事務所に駆け附ける。吉原でいるものは出張所に駆け附ける。後には吉原の西の宮と云ふ引手茶屋と、末造の出張所とは氣脈を通じてゐて、出張所で承知してゐれば、金がなくても遊ばれるやうになつてゐた。宛然たる遊蕩の兵站が編成されてゐたのである」

これなんか、事務所は兵站監部、出張所は兵站司令部、引手茶屋は大隊行李こうりと、当時の陸軍の編成にそのまま置き換

えることができそうなのである。鷗外その人もそれを意識して「遊蕩の兵站が編成」なんて説明しているのが、ほほえましくもある。

兵站という言葉から酒保という軍用語がなつかしく思い出される。いまは死語となっているけれども、兵隊小説や映画ではかならず登場してきていた。連隊の兵営内で日用品や飲食物を売るところである。近頃でいえば大学の生協というわけ。ところが、鷗外の書簡集を読んでいたら、妙なことに気づいた。明治三十八年の日露戦争で、出征先の満洲の広野から五月十五日付で、しげ子夫人宛に送った手紙のなかで、鷗外はこう記している。

「戦地に、酒保になつて女が来るといふ話は全かうそだ。酒保はよくばりのおやじばかりさ」

明らかに鷗外は、酒保を場所としてではなく、人物として使っている。早い話が、下に人の字をつけ、酒保人としたほうがわかりやすい書き方をしている。歴史探偵としては大いに胸躍る事件（？）に遭遇した思いで、それを調べてみたのであるが、この語は漢語からきている。諸橋轍次『大漢和辞典』にも第一義として、「さかやの雇人。酒家保」とあり、『史記』の一文を例にあげている。「窮困し、斉の賃傭され、酒人保となる」と。

またある本には、『水滸伝』にも、「酒保下り去る。ただちに酒を盪あためて上り来る。酒保いう、官人怒りをやめよ」とあると書かれているそう。

これで見るとおり、酒保は場所でなく、人を指すのが第一義。転じて兵営内で兵士に飲食物を売るところとなった。さすがに森軍医総監どのは正しく使っている。

(はんどう かずとし・作家)

本とともに過ごす「時間」

徳永 圭子

お客様が本を探している姿を見ては、「この本達は、これからどこにいくのだろう」とちらり考えます。

通勤電車の中で今日の仕事のことなど忘れんとして読まれるミステリもあれば、暖かい部屋でひとり読む恋愛小説もあるでしょう。先日購入した新しいソフトがどうもうまく使いこなせない苛立ちもあれば、同じ給料のはずなのにやたらに羽振りのよい同僚が、近頃株に手を染めているという噂を聞きつけ、矢も盾もたまらず、ということもあるかもしれません。

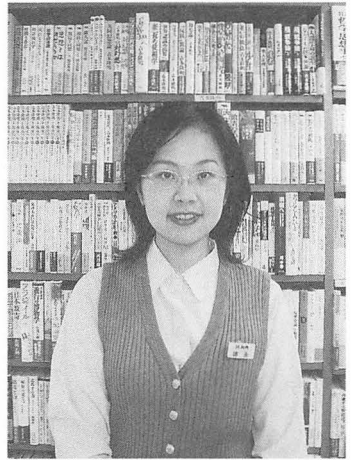
「こんな世の中まちがつている！」と叫びたいけれど、どうまちがつているのかうまく説明がつかないので、同じような意見を本の中に求めてみる人もいれば、読めば読むほどわからない本に果敢に挑むことを何よりの楽しみにしている人もいます。

お客様が支払っているのは本の代金だけではないはずで、誰かの書いた物語や随筆に心休まる場所を求めている人や、多忙な日々の中で何かを得んと本を探す人に出会うたび、本とともに過ごす「時間」の在り処について考えます。

それぞれの読者が本のために費やす時間を少しでもたくさん得るためには、どんなことをしたらよいのか。どれだけの魅力をもった店を作れるか。そんなことを考えながら日々売り場に立っています。

二〇〇四年、当店では歴史書、特に現代史の本が好調でした。

自らが生きてきた時代を読むことは、足跡を確かめる作業でもあり、そこにいたはずの自分が見えなかった、見逃し



筆者近影

た出来事を発見する機会であったかもしれませんが。遠ざかって行く昭和を取り戻した後、もう一度書店に足を運んでくださったお客様が、つぎにどんな本を手にするのか。

想像する（もちろん、仕入れる）だけでも心躍ります。ご購入いただければなお一層。

お客様には公表していませんが、私が勝手に手元で作っている「ランキング」があります。

文庫・単行本・ムックなどの版型や価格で分類せずに、売上冊数を「小説」「マニユアル」「仕事」などの内容・目的別に並べたもので、その順位からは、仕事や暮らしの道具として本を必要とした人の数や、本を読む人たちの新たな発見や驚きのひとときを垣間見ることができます。

読んだふりだけでもしたくなる本や、その本を持っているだけで、なんとなくわくわくする本というのもあって、賄い料理のようなこのランキングの分類に「いつか読む本」なんていうのもあってもいいなという思いに耽ったりすることもあります。

本の行方をそんな風にして追いかけていると、毎日が瞬く間に過ぎていきますが、時折「あの時売った本」のことを振り返ってみて、数ヶ月前のことをはるか昔のことのようにかたづけてしまっていることに気づきます。いいかげんなものです。反省してまた積む。そんな作業の繰り返しでありあつという間。

他人の時間を数えている暇があったら、自分のそのだらしのなさをどうにかしろよ……と言う声があらゆる所から聞こえてきそうです。

それでも気になるあの本達の行く末。二〇〇五年もまた、追いかけて続けます。

（とくなが けいこ・丸善福岡ビル店）

わが赴くは本の群れ

中藤 龍一郎

一番好きな本は、と問われれば「まだ出会っていない本」ということになる。

愛読書を再読、三読するのもまた楽しい経験だが、男性の本能はテラ・インコグニタ、未知なる地平を求めるものだ。いまだ出会っていない本。日々、本にまみれているというのに、いまだ出版されていない本のことを考えるだけで幸せな気分になる。こんな本があつたら。早くこの本が読みたい等々……。

そのような「いまだ出版されていないけれど、読んでみたい」本、「書店としてお客様にお奨めしたい」本を、趣味の良い独断とバランス感覚に富んだ偏見で一覧にしてみた。

本誌の読者には釈迦に説法であろうし、公の紙面を私的かつ半可通な興味・嗜好で満たすのは大変心苦しいけれど、それは私の抽斗の少なさ故とご寛恕いただければ幸いです。

1 辞書・辞典類

「外国語固有名詞発音辞典」——カルチャー雑誌を刊行している友人からの依頼で、ときどき翻訳らしきものをさせてもらっている。自身の圧倒的な英語力不足や日本語のボキャブラリーの貧困さなど幾多の問題があるのだが、中でも外国語の固有名詞の発音、表記がやつかいなのである。

「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」というように、人名はもとより地名・都市名などは本当に難しい。

このようなときに重宝なのが、三省堂から刊行されている『固有名詞英語発音辞典』。この辞典は「英語国民の間で

確立している固有名詞の発音は無論のこと、英語で書かれた文——音素およびその配列が英語的である文——の中で、あまり耳障りにならぬように外国音の固有名詞を英語音に転写する試みが、かなり大胆に行なわれている」（同書「はしがき」より）というもので、この辞典には何度も助けられている。

贅沢を言わせてもらえるなら、実際の発音を聞けるCD-ROMが付いていると、まさに鬼に金棒である。

どのように発音するのか皆目判らない固有名詞を、まず辞典をひいて目で確認し、次にCD-ROMを聞いて耳で確認をする。そのようなセットであれば、私のようなへば翻訳者の不安も大幅に減るといえるものだ。

2 歴史書

「経済から見た世界の歴史」——中学・高校を通して、数学・物理には残念ながら親しくしてもらえなかった。私は数学や物理に対して何ら含むところは無かったのであるが、向こうが私を気に入らなかったのであろうと思う。縁、というものだろう。

歴史、特に世界史に関しても何か釈然としないまま、授業を受けていたように思う。その理由として、

- ① 人間は戦争ばかりしている。
 - ② 私は暗記ばかりさせられている。
 - ③ 本当のところはどうだったのか、今では知るすべが無い。
 - ④ 教師が嫌いだ。
- などであった。

五千年以上に及ぶ人類の歴史をわずかな授業の時間で遣り繰りしようとするれば、いきおい単なる概況説明やダイジェストに終始するのは判る。しかし「歴史」といわれるものが、なぜ国家同士の戦争を主軸として語られるのが納得できなかったように思う（私が真面目な学生であったならば、その疑問をもったまま大学の史学科に進学し、今頃はアナール派の若き研究者になっていただろうに、実に残念である）。

人類の歴史を経済から眺めるとどうなるだろうか。モンゴル族の世界征服も、経済面を担当していたウイグル族の戦

略に沿ったものであったとか、第二次大戦もファシズム対デモクラシーの争いではなく、経済を巡る争いだったなどという方が、腑に落ちるのではないかと思う。

経済を主軸として語る「歴史書」。さらに付け加えるならば、その書き方も網野善彦の『日本の歴史をよみなおす』のような、中学・高校生向きになっていれば、なお良い。難しいことはいくらかでも難しく書けるものだから。

このような本、もしかしたら、ポール・クルーグマンあたりがすでに書いているかもしれない。

3 美術書

「展覧会カタログ」——旅行の楽しみといえば、郷土料理を食すこと、地元の古書店を巡ること、温泉に入ることなのだが、旅先の美術館に行くというのも、また楽しい。

美術館のいいところは、

① 人も少なく、静かにゆっくり見ることができる。

② 原画が見られる。

③ 学芸員の女性は美人が多い。

などで、心の洗濯にはうってつけである。

さらに嬉しいのは、展覧会のカタログだ。ほぼフルカラーで、解説や書誌が充実しているのに、価格は安い。ついつい買いつけて、あとでカタログの重さに泣く破目となるのではあるが。

展覧会のカタログは、いわゆる出版流通に乗っていない。だからカタログを購入したいと思う者は、どこの美術館で、どんな展覧会をしているのか、こまめにチェックしていないと買い逃すことになる。そしていったん買い逃せば（人気のある展覧会であればあるほど）入手はかなり困難だ。

最近になって展覧会カタログを書籍として再編集し、販売するパターンが出てきている（梧桐書院刊の『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』など）。このような展覧会カタログの書籍版は一般読者をはじめ、大学図書館や公共図書館でもニーズがあると思われるのだが、いかがだろうか。

4 哲学・思想書

最近頭が悪くなったような気がしている。恐らく気のせいだとは思うのだが、心配でもある。

そのような心配に囚われたときには心の姿勢を正すため哲学書を読むようにしているのだが、読めば読むほど「私は馬鹿ではないか」という更なる心配をする破目となり、馬鹿恐怖症のデフレ・スパイラルへと落ちていくのだ。

このような「馬鹿デフレ」に囚われている人は多いと思うし、児童の学力低下が危惧されている昨今のわが国を考えると、早急に対応策が必要となるだろう。

そのひとつとして、哲学書や思想書をジュブナイル化するというのはどうであろうか。

井上ひさしの長篇『吉里吉里人』の中で、小林秀雄の評論（たしか『モオツァルト』を東北弁に「翻訳」したら、がぜん判りやすくなるというギャグがあったが、平易な言葉で（ただし論理はそのままに）難解な文章を翻訳するシリーズというのは面白いのではないか。

オリジナルの文章の響きや美しさは犠牲になるかもしれないが、論理の力強さは残すような「翻訳」ができたのなら、少なくとも積読となりやすいドウルーズやリオタール、イーグルトンやレヴィナスももう怖くはないのである。

5 文学書

① 国内『阿部青鞋全句集』——学生時代に何気なく手にした富沢赤黄男の句集を読んで以来、現代俳句に興味を持つようになった。卒業論文も加藤郁平をテーマにしたのだが、郁平作品の難解さに大いに苦しめられ、また（枚数稼ぎの）引用も俳句だと一行しかできないことに締め切り間際気付き、自らを呪ったこともあった。

社会人となり、俳句熱も冷めてきているのだが、一貫して興味をもっている俳人に阿部青鞋（あべ・せいあい）がいる。大正三年に生まれ、平成元年に亡くなった、この俳人を知っている人は少ないだろう。昭和初期の新興俳句に参加し、古典俳諧に知悉しながらも、その句風は極めて異色だ。

砂浜が次郎次郎と呼ばれけり

半円をかきおそろしくなりぬ

かたつむり踏まれしのちは天の如し

機関車はさびしいところだけ走る

青鞋作品は、選集『俳句の魅力』こそあるものの、『火門集』、『続・火門集』、『ひとるたま』はいずれも非商業出版物であり、また晩年の句は未収録となっている。九十二年に書肆稻妻屋という版元が青鞋全集を企画し、一配目に『火門集』をひっそり刊行したが、これは頓挫してしまったようだ。

同じ新興俳句の仲間である西東三鬼は勿論のこと、富沢赤黄男や渡辺白泉の全句を取めた句集が出版されているのだから、ぜひ青鞋にも全句集があつたらいいと思う。

② 海外『W・H・オーデン全集』——趣味は何かと聞かれれば、読書という答えになろうが、どのような分野が好きかと聞かれると少々ためらう。SFと現代詩などと正直に答えて会話が盛り上がったたり、恋愛関係にまで発展するようないことはついぞ無かったからである。多少知恵のついた昨今ではただ笑いながら沈黙をまもるようにしている。

SFも現代詩も国内の読者人口は一人いるかないかであろう。多くの読者を抱えるミステリや俳句などとは異なる少数民族であり、その絶滅を救うためにも至急の文化保護政策が必要とされる分野だ。

この「保護政策」のひとつとして、W・H・オーデンの全集を提案したい。

オーデンは（私見では）現代詩のチャンピオンであり、優れたエッセイスト、劇作家である。シェイクスピアやリュ・ス・キャロル、あるいは聖書のように、彼の詩句や箴言は海外作品の中で数多く引用されている。日本では、戦後現代詩の代表グループ『荒地』の詩人たちに決定的な影響を与えており、その意味でオーデンこそ「日本現代詩の祖父」なのだ。国内では思潮社をはじめ、オーデンの選集やエッセイ・評論集は出ているが、全集は刊行されていない。アメリカではプリンストン大学の出版部から、全四巻が十四年かけて出版されている。日本でもオーデンの全集刊行を望む。

以上、素人の怖いもの知らずで漫然と書き連ねてみた。仕事と興味を満たせる仕入という部署で、今日もどのような本と出会えるか楽しみだ。本には終わりがいいから楽しみもまた尽きない。

（なかふじ りゅういちろう・図書館流通センター仕入部長）

〈人文会特別講演〉

がんばれ！ 日本の図書館

鳥取県立図書館館長 斎藤明彦

（いま、地方で活発な活動を展開している図書館の一つ、鳥取県立図書館の斎藤明彦館長に人文会として講演を受けました。地方分権、市町村の合併などが声高に言われている現在、図書館の可能性についての多くの提言がなされております。）

自己紹介をかねまして

齋藤 いろいろ考えて、この講演のレジュメをつくらうと思ったのですが、出来なかった言い訳をちよつとさせてもらいます。お手許におくばりした「冬の時代なんていわせない」と「図書館のマネージメントと戦略上の位置づけ」という、ちよつとしたレジュメを二つ持つて来ました。「冬の時代なんていわせない」というのは、先週、沖縄県の図書館大会で講演した分です。沖縄もかなり図書館は厳しい状況なので、図書館の元氣が出るような話をしてもらえないかということで、そういう想定で

やりました。

もう一つ、「図書館のマネージメントと戦略上の位置づけ」は、実は今日この後の会議で使うぶんです。文部科学省の「これからの図書館のあり方検討協力者会議」という会のスピーチ用のレジュメとしてつくったものです。対象が当然違いますし、力点が違います。

講演する対象によつてバラバラにいろいろな球の投げ方をしているので、どういう球の投げ方が一番いいのかというのが、よく分からないということがありますが、今回は二つピックアップしている「冬の時代なんていわせない」と「図書館のマネージメントと戦略上の位置づけ」の分をミックスしながらお話ししようかと思っています。

皆さんは図書館についてある程度状況をよくご存じだと思いますが、状況をご存じない方のために話をしたほ

うがいいのか。ある程度なんとなくは分かるというベ－スで話をしたほうがいいのか？

大江「人文会ニュース」は、各図書館単位に送っておりまして、その方々にある意味向けてという意味合いです。ので、まったく知らない方ではなくて、ある程度は関係のある方という想定で構わないと思います。

齋藤 それでは、そういうことで話をさせていただきます。

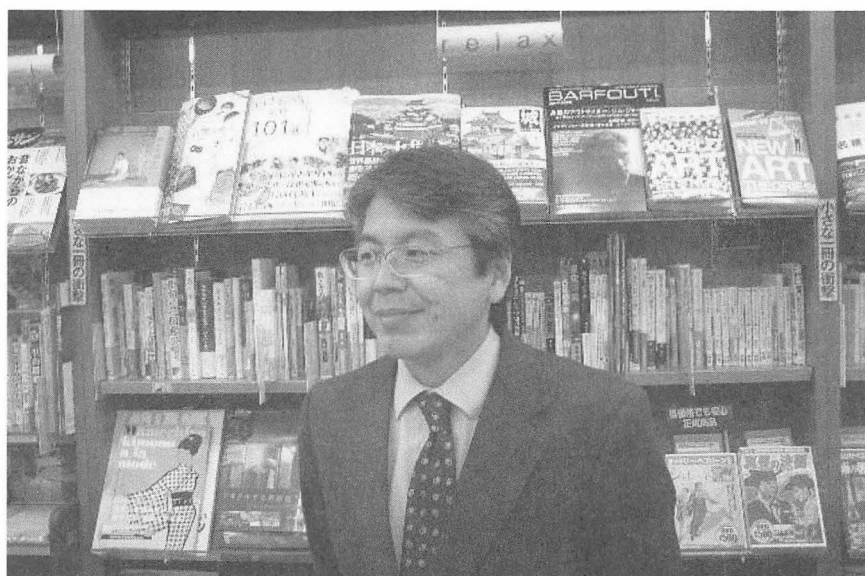
齋藤 私はいま四十八歳です。二年半前、四十六歳のときに鳥取県立図書館の館長になりました。図書館の館長という立場ですが、私は実は図書館の良いユーザーではありません。それを言い訳するとすれば、私が鳥取の中でも田舎で生まれたということがたぶんあると思います。小学校は、皆さんもそうだったと思いますが、本がそんなに多くなく、責任者が誰もいないような状況の図書館でした。それはそれで勝手にいろいろなものを見せてもらってよかったです。中学校は鍵が掛かった図書館でしたし、高校のときは大学の案内を見るぐらいしか私は図書館を使いませんでした。

大学は京都だったのですが、かなり放ったらかしの大学だったものですから、結局、大学に行っている間中、図書館のカードさえもつくらずに終わってしまって、結

論から言えば一冊も本を借りたことがなかった。いまだにそれが続いていて、本というのは買うものだというのが染みついています。そういう意味で言うと図書館長としてはまったく不適格なのです。

一方で、子供が出来てから以降、私自身が本が好きだということとは、親を含めて家族が私に残してくれた非常にありがたい財産だと思っています。これですぐいぶん助けられています。ですからそのことだけはなんとか子供にも提供してやりたいと思って、我が家での私の仕事の一つが子供に本を読み聞かせすることです。そんなことも含めて子供を本好きにするというのが私の仕事だっただけだと思います。いま小学校五年生と三年生で、両方とも非常に本が好きです。いまだに夜寝る前に読み聞かせをしています。

略歴的なことと言いますと、県庁に入ったのが昭和五十四年です。税の仕事が二年間。そのあと財政に十年いました。この経験が非常に大きな影響を与えています。財政というのは非常に季節労働的なところがあって、忙しい時期はものすごく忙しいところです。かなり若い時期に行ったのですが、知事の査定まで自分の担当のところは何らかの形で立ち会います。それで最終的にどういうことを知事が考えて政策判断をするかということが、



斎藤明彦氏（鳥取・定有堂書店にて）

かなり早い時期から覚えられたというのは大きなメリットだったと思います。図書館の施策を考えるときにも、多くの人は金が無いから絞ろうとするのですが、それはある意味間違っている部分があります。そういったことも後でお話したいと思っています。

一番ハードなところを先に経験したので後が楽だったというようなこともあります。その後、これも後の仕事と関係があるのですが、商工の企画的な部門で四年間やりました。四年間やった後で教育委員会の高等学校課の補佐になって今年でちょうど教委が十年です。

いま図書館と関係していろんなことをやろうという部門をたまたま歩いてきたということもありますし、逆にそういうところを歩いて来たから、そういうところに向かつてのいろいろな発信を今やろうとしているという部分もあります。それは後のほうの話で分かっていただけだと思います。

鳥取県立図書館の紹介を簡単にします。平成二年十月に今の館になりましたから、ちょうど十四年たつて、来年（二〇〇五年）が十五周年ということになります。場所は道路を隔てて県庁の真向かいです。駅から真つ直ぐドーンと県庁にぶち当たるその手前にうちの建物があるって、そのそばにはさまざまなイベントや会議が行われる

県民文化会館があります。したがってロケーションとしてはかなり良い場所を与えられています。

面積はだいたい九千平米。蔵書が七十七万冊。七十七というのは決して大きな数字ではないですが、中国地区の中では一番多い。中・四国で言うとき徳島がたくさん持つていらつしやるので、中・四国でうちは二番目という感じでしょうか。資料費が一億一千万円余り。これははっきり言つて分不相応と言つてもいい数字だと思います。本当は県立図書館の運営には一億円必要なのですが、なぜ「分不相応」かと言うと、全国的に見ると、うちの県は六十一万しか人口が無いのに、絶対額で全都道府県中七番目です。ですから例えば、神奈川県や兵庫県などの大きな県よりも、うちの県立図書館のほうが資料費をたくさん持つているという状況です。決してそれはうちが多いんじゃないんです。ほかがもっと多くすべきなんです。しかし今の状況の中でそうならないということなのです。

貸し出しと入館者数。貸し出しが四十八万冊。実は三年ぐらい前まで三十五万冊前後ぐらいで推移してきました。十五年、十六年とぐんぐん伸びて今の四十八万という数字になりました。入館者数は、いま四十二万人です。これも三十万人台から、ここ二、三年のうちに増えてき

たという数字です。

鳥取県内の図書館状況を見ると、典型的なガリバーの状態です。何がガリバーかと言うと、まず一番分かりやすいのが資料費です。資料費が先ほどいうは一億一千万と言いましたが、全国の都道府県立図書館と市町村立図書館を単純に平均してしまつと、だいたい一対九の割合になる。しかるにうちの県の場合は四六%対五四%ということ、半分以上の資料費を県立図書館が持つている。これは先ほど言いましたように「分不相応」ということともありますが、市町村立図書館がやはり弱いんです。本当はもっと中核になる図書館が資料費を持つて、活発な動きをしていただければいいなと思つていますが、なかなかやはり今の状況では難しい。

図書館を取り巻く状況

次に図書館を取り巻く状況について簡単に説明します。図書館の業界の方は取り巻く状況について、分かっているようで本当に分かつていないのかという疑問を持つことがときどきあります。本来は情報のスペシャリストでないといけないのですが、今からご説明するような内容を本当に十全に理解されている方はそう多くはないだろうと思います。

まず合併という問題があります。すでに合併はスタートしていますが、これは二つ三つ大きな意味があります。一つは合併することによって、今まで図書館がなかったところが、あるところとくつつくものだから、図書館がない地域がほとんどなくなってしまうのではないかと。うちの県が実際そうです。あるところないところの組み合わせというのが多くありまして、ほとんどがるところになった。しかし現実にあるかと言うと、今までと館の数は変わらないわけです。

合併というときに非常に問題になるのが、複数の館がくつつくと、それぞれの中でサービスの差がかなり歴然とあるということです。質の違いということもありますし、本当にサービスをしているところと、そうでないところがある。これがくつついたときに、どっちのほうに行くのか。あるいは今までになかったようなサービスが出来るのか。

合併というのはマイナスの面とプラスの面があるのですが、マイナスの面だけ言うと、漫然として待っている、結局そこの中の一番大きな市だとか、そういったところの制度にそのまま適合させられてしまう。それがいい制度だったらいのですが、その制度が決して良くない場合があるわけです。そうすると、きちんとした議

論をやらないうで合併したときには、その地域全体のサービスは場合によっては低下しかねない。

逆に合併というような問題の前提として、地方分権だとかそういうことがあるわけです。地方分権とかがあつて、自分たちのところで今まで以上にきちんとした仕事をしなければいけない。だから合併をして、そういう仕事が出来るようにするのだと考えるのだったら、図書館も同じように考えるべきだと思うのですが、そこが出来るかどうか。そこがきちんと詰めてあつて、合併までに我々はこういったサービスを提供したいんだということが皆さんに共有され、それが行政のほうで取り上げられるという状況になればいいのですが、そうでなかった場合には非常に危ない。

それから都道府県立と合併について。これももつとピンと来ていないというところが多いのです。都道府県立にとつては合併というのは非常に意味危ない状況です。なぜかと言うと、都道府県立は市町村立のバックアップをするということが存在意義の一番大きなものなわけです。ところがいま言ったように、うちの県で言うと三十九あった市町村の数が十九になる。それがほとんど図書館がありますよという状況になります。漫然と待っていると、「今まで県立図書館は市町村のバックアップ

が一番大事な仕事だと言つてたよね。言つてたけれども数が減つたよね。それぞれのところが全部自力でサービスできるようにしたよね。だったら今までほどサービスしなくたっていいじゃないか。そのために投入していただいたお金や人はほかのものに回せるんじゃないか」といわれかねない。

ほかというのは、この場合は図書館という意味じゃないですよ。ほかの仕事、つまり教育委員会の他の課、あるいは教育委員会以外のほかの仕事にその人なりお金を取つて持つて行くことが可能だというふうに見えます。私が財政課だったら絶対そう言います。今までの仕事より絶対量が減つたでしょうと。

ただど一方でチャンスだということも言える。そのチャンスというのは、逆にそれを見越して、減る分について我々は今からこういうような、これまで出来なかつたことをやりたいんだと。これは地域のためになるんだということがきちんと提示できて、それを財政当局や教育委員会に納得させることが出来れば、今まで出来なかつた図書館活動はそこで可能になってくる。でも財政に言われるより先に提案しないと、減額をふせぐためにあわてて出したと思われ、認めてもらえません。

それから交付税（地方財政）の問題です。去年から今

年にかけての地方の財政に対する国のスタンスは一変したと考えるべきだと思います。図書館の人たちは、もしかしたら、ずっと財政当局が金がない、金がないと言つてきたから、同じペースで金がないと言つてるだけと受け取っている人がいるかもしれないけど、それは間違いです。

なぜかと言うと、地方財政は結局交付税で、特に東京都のような強力な団体以外のほとんどの日本の団体は、交付税によつて足りない部分を埋めてもらつていろんな行政をやっている。交付税というのはもともと国税の何パーセントというのがありますね。国税が減ると交付税が減る。その場合には交付税の特別会計が借金したり、あるいは「都道府県市町村が借金しといてくださいね。そこで借金しといてくれたら、我々がその分あとから補填してあげるから、今のうちは借金しときないさいよ」というような形で穴埋めをして、不足しないようにということを今まで考えてきたわけです。今もそうだとと言われるかもしれません。だけど去年と今年を比べると、全部ギユツと圧縮されているわけです。要は総額を圧縮しにかかっている。

国が総額を圧縮しにかかっているのに、図書館は今までと同じような気持ちで財政が金がない、金がないと言



鳥取県立図書館

っているだけだと受け取っているとしたら、そのところのリスクマネージメントがちゃんと出来ていないと思うんです。

今、うちの県の市町村もそうですが、思いきり削り込まれています。従来の守り方では図書館というのはもう守り切れないんです。それを分かって欲しい。そのところを考えないと、本当に必要とされるサービスをこれから提供しようとしてもどんどん切り込まれていくことになります。

一方で、今の行政というのはそんなものだと思うのですが、一人の人でもいろんな要望が出てくるので、行政がどんどん多様化していきます。ですから同じ一つの課がやる仕事も、十年前に百だとすると今は百二十とか百五十とかっていう種類になっちゃうわけです。それぐらいの幅を持って仕事をしないと満足してもらえない状況です。しかしそれに合わせて金や人が増えているかと言ったら、そうではない。

図書館はどうか。図書館はこの十年の間に、時代の変化に応じたサービスをきちんと投入してきただろうか。もし投入できてなくて、多少量は増えても十年前とサービスの内容がそう変わっていないとしたら、外から見てほかのところは同じ人間、同じ予算でこれだけのことを

やっているのに、図書館はそうじゃないと思われたときにはマイナスのほうに働くわけです。

「お金返して。人だつてちやうだい。もつとほかに仕事たくさんやっているとこがあるから、そっちに投入しなきゃいけないから」となっちゃいます。だからそうならないために何をしなければいけないかと言うと、やはりその時代や今のニーズに合ったような事業展開をどこまできちんと出来るか。それも今やらないとダメ。今から二年の間ぐらいにやらないと、結局予算も人も削られていつて、新しい事業展開をするだけの体力を図書館が失ってしまうと思うんです。失ってから新しいことをやろうと思つてももう無理です。

もう一つは、館長業務も含めて、民間の方などに図書館の運営をまかせられる指定管理者制度というのが昨年出てきました。指定管理者制度自体は、これを言う図書館の方を敵に回すかもしれません、私は百パーセント否定する気にはなりません。言い方は悪いかもしれませんが、必要悪的なと言つたら、今度は指定管理者制度の人たちに怒られるかもしれませんが、絶対的にダメだという議論は間違つていのではないかと思います。

指定管理者制度は先ほど言つたように、急速に悪化していく財政の中で見れば、財政当局にとっては非常にお

いしそんな制度なんです。例えば先ほどお話ししたように、同じサービスをずっと続けるということでは、コストを下げられることが一番の魅力だろうと思います。そんなことを言いながら実は私のところは指定管理者制度は嫌だと言つて、今だいたいそっちの方向で動きつつあります。なぜ嫌かと言うと、新しいニーズだとか、そういったものを捉えて、それに対応する策を次々に取つたり、それぞれの策を連携させたり、あるいは外の人たちといろんな形でタイアップしたりというようなことで事業展開しようとする、委託という制度ではなかなかそれがスピーディに出来なかつたり、あるいはコストとパフォーマンスとの関係が、我々が考えているのと少し違うコストとパフォーマンスの考え方になつてしまふのではない。それが一つ。

もう一つは、こつちのほうが本当は恐いのですが、もし委託するとしたら、委託の中身についてきちんと説明できるのか？ 受託側ではなくて委託側のほうが、「図書館の仕事は今こういう仕事で、こういうニーズがある。だからこういうような事業展開をこれからすべきだ」と。それをするときに、例えばマネージメントとして、こういったものとかこういったものを組み合わせてやつたほうがいいというふうに、委託側で指示が出せる

人がいったい何人いるかということです。

去年と同じことをやれということだったら委託は簡単だと思いますが、時代と共に変化させていくということを考えて、委託者側の確な人材があるかないかというのが、五年後、十年後に相当大きな差が出てくるのではないかと思っています。

特に我々のところで言うと、先ほど言いましたようにガリバーだったり、ビジネス支援なんかでも、やはり市町村はすぐに取りかかれない、体力的にも弱かったりするようなことがあるので出来ない。そういったものを我々は先駆的にやっていこうとする。そうすると、それはやはり私の感覚で言えば、指定管理者にはなじまなくて、直営でやるから、次々にさまざまな展開やスクラップ・アンド・ビルドも出来ていると思っています。

逆に、直営だからこういうメリットがありますよというのがきちんと言えないと、指定管理者制度と比較されたときに直営のコストの高さを指摘されてしまう。そういうのが今の状況だと思います。

地方だからこそ図書館は重要！

地方分権が言われています。とにかく地方分権にしても自己責任にしても、自分の言ったこと、自分のやるこ

とは自分で後始末をつけるよと。別に公のほうとしては何も手出しはしないから自分たちで考えなさいよねというようなことだろうと思います。その代わりいいことも悪いことも、結果は全部自分で引き受ける。ただし、そのときには自己責任の前に自己判断があつて、自己判断するときには、その自己判断が間違わないように、リスクが大きくならないようにするために、情報を的確に持たなければいけない。

その情報をいっただい誰が出してくれるのか。あるいは情報が欲しいと思ったときに、いったいどこに行ったら情報が手に入るのか。どういう方法で手に入れることが出来るのかということです。

その情報提供機能云々のことで言うと、今日お集まりの方は東京周辺にご在住の方ばかりですが、田舎と東京周辺とはまったく情報提供の機能が違います。「情報ギャップ」があります。このあいだ講演をした調布市でもあるいはその近くの武蔵野市でも、お話を聞いたたりすると、大学が狭い地域の中にいくつもあり、積極的な大学もあつて、図書館と組んだり、あるいは大学単独でどんな情報を出してくれる。

シンクタンクもたくさんありますから、それぞれのところがいんなものを出したり、あるいは欲しいと思つ

たときに、すぐそこに聞きに行ったり出来る。研究施設もそうです。それから各種のセミナー・展示会は田舎と大都市圏では圧倒的に量が違います。

それからこれが悲しいぐらい差があるのです。書店の差です。こちらにはいま本当に大艦巨砲主義みたいなすごい書店がボンボン出来ていますが、ああいう感じでいま欲しい本がすぐ手に入る状況は、田舎では全然望めません。

それだけ情報のギャップがある中で、自分の持つリスクをいかに小さくするかということで考えたときに、みんなが一番行きやすくて総合的な窓口になれるのは図書館しかないと思うんです。そういう意味合いで、田舎では図書館というのは絶対に必要なものだ。でも現実とは逆です。

大都市周辺の立川、浦安、調布など、大都市周辺の情報を比較的手に入れやすいところの図書館は非常によくがんばっている。しかし本当は逆なんです。田舎のほうの情報が入らない地域の図書館のほうがんばらなきゃいけないのに、がんばれていない。当然全部が全部じゃなくて、がんばっているところもあるけれども、やはりそのあたりに認識の差がずいぶんあると思います。

取り巻く状況になります。僕が非常にありがたいな

と思っているのは、特にうちの県はそうですが、ブックスタートです。それと幼稚園・保育所は読み聞かせ。高校はそれほどでもないのですが、小学校、中学校の朝の読書とか、本を使った授業の展開など。少なくとも鳥取県の場合は、それぞれの実施されている率が高いですし、僕は大きい効果を上げていると思います。

ブックスタートあたりで言うと、こんなことがあります。ある子供の読書に関連する委員会に私もオブザーバーみたいな形で出たのですが、鳥取市の保健師の方にブックスタートの実施率について聞きました。実施率というのは、保護者とお子様がワンセットだとすると、すべての組を百としたら、何パーセントの方にブックスタートへの参加と言うか、本を手渡すということが出来ているかということですが、それを聞いたときに、百パーセントだという話がありました。

百というのはいったいどういうことか。普通はいくらがんばっても九十何パーセント。検診の際にブックスタートをやっていますが、そのときに出て来ない人たちがいるわけです。それはどうしてるのと聞いたら、全部一軒、一軒回っていますという話だったので。

これは非常に立派だなと、大したことをやっているなと思ったのです。僕の実感で言えば出て来ない人たちの

ほうがリスクが大きいわけですね。六ヶ月検診のときに出て来て、ちゃんと話を聞いて本をもらって帰る。一方で、検診に出て来ない人たちが若干名いるとすると、その人たちのところまで出かけて行って本を手渡しして、ある意味状況も見えて帰ってくるということをやっています。そういう形でブックスタートから始まって、いま言ったような読み聞かせ、朝の読書までつながっている。朝の読書はもうほぼ百パーセント、小・中学校ではやっています。

その差がこれから先非常に出てくるのではないかと。後で説明しますが、我々が高校を一生懸命やろうと思っているのもその流れの一つなのです。やはり在学中に読書教育、あるいは図書館を使うという体験をなにがしかの形で子どもたちがしているのと、していないのとでは相当差があると思います。

そのまま大学に行ってしまった人たちに対して、ある大学の先生は、もう君たちには期待してないと言うそうです。なぜかと言えば、君たちはきちんとした読書教育を受けていないから、レポートを書かせても必要なものをきちんと読みとって書くことができず、丸々写してしまったりする。だから、もう君たちには期待しないと。君たち以降、きちんとした読書教育を受けた学生が来る

のを僕は待っているなんていう話をすると言うのです。ちよつとそれはひどいとは思いますが、分からないでもないのです。

文部科学省の変化ということについてですが、今年の五月末に文部科学省と日本図書館協会が初めて組んで明治大学で「ディスカバー図書館二〇〇四」という大きなイベントをやりました。千人ちよつとぐらいの会場だったのですが、本場に満杯で、途中で帰る人に席の券を返してもらい、その券をキャンセル待ちしている人に渡すというような状況でした。

文部科学省は、どれだけ盛り上がるのか、人が来てくれるのか、かなり不安だったみたいです。やってみたら非常にたくさんの方が来て、なおかつその後から取ったアンケートなどをみても反応が良かった。たぶん文部科学省も自信を持ったと思います。今まで文部科学省自身どちらかと言うと、公民館のほうには力が入っているけれども、図書館や読書教育にはそれほど力が入っていません。ではないか。言うとも怒られますけれども。私も文部科学省の委員になっていきますけれども、そう見えるんですよ。公民館などに対しての手厚さと、図書館に對するものとはちよつと違うんじゃないか。

ただ今年例えばそういう大きなイベントをやった

り、今日この後出席しますが、国内、国外の図書館などの調査もやって、これからの日本に必要な図書館というのはこういう図書館なんだというのをまとめ上げて出そうとしている。

そういうところを見れば、文部科学省の根本的なスタンスが変わりつつあるような感じがします。そういったものには期待できる。だから決して期待できないものばかりではなくて、先ほどきびしい財政の話をしましたけれど、図書館にとっては追い風だって吹いているということです。

ソフトによる住民満足と「役に立つ」図書館

今これだけお金がなくなってくると、地方は、あるいは国もそうかもしれないませんが、ハード事業によつて国民、県民の満足を得ようとすることはもう無理だと思います。例えば道路や箱物をつくることによつて地域住民に満足を提供する。これからつくれないと言うわけではないのですが、お金がないから今までと同じようなペースでつくれるはずがない。

そこからの考え方の違いなのですが、お金がないから絶対無理だからハードはやめる。だけど併せてソフトもやめるのかということです。ソフトもそこで抑えていい

のか。財政的な考え方で言えば全体を抑えようという考え方はあるかもしれませんが。

しかし施政者の側に立つてみると、例えば首長だとか議会の側の考え方で見たら、ハードは無理だし、ソフトもやらないのなら、いったい何によつて住民に対して満足を提供することが出来るのかと悩むと思います。だから僕は逆だと思ふんです。彼らは、住民に夢や満足を提供したいから、何もかも切りつめることを決して喜びはしない。お金がない今だからこそ、お金が極端に掛かるハードものは抑えるにしても、ソフトの中で投資効率のいいところに投資すべきだと思います。

投資効率のいいところはどこか。僕は図書館だと思ふけれども、それはそれぞれの図書館の状況によつて違います。その場合、図書館が非常に大きなネットワークとして抱えているのが、図書館はたんに趣味的なものだということ見られ方あるいは捉えられ方をしていないかということですよ。

例えて言えば、子供が行くところ、お年寄りが暇つぶしに行くところ、本好きがたんに行くところ。それをひっくり返してみると、忙しく働いている者にはほとんど関係ないところというイメージを持たれていないかということですよ。現実にもう見られていると思うんです。そ

れが非常に大きなネックです。

どこの家庭でもそうですが、お金がなくなったらまず最初に何を始末するかと言ったら趣味ですよ。お父ちゃんの小遣いなんかで趣味的なもの、飲みに行くのをちよつと減らしてとか、音楽会に行く回数を減らすというようなことになってくるわけです。

趣味的だと思われていると、図書館というのはいつまでもたつても真つ先に、あそこは削つてもいいんじゃないかと思われる。図書費は削つたつて、そう簡単にはつぶれないだろうという見方しかされないんじゃないかと思うんです。

そうではなくて図書館というのは、(特に地方と言うと都市圏の人に悪いかもしれませんが)特に地方では、その地方が、あるいはその地方に住んでいる個人がこれから生きていく、活躍していこうとする、地域を振興していこうとする際に、一元的に情報を提供してもらえ、唯一の施設だという見方をしてもらえのだったら話はまったく違うと思うんです。それが出来るのかどうか。

「役に立つ、役に立つと認識してもらえ図書館」。これは僕が館長になってすぐの頃に、こういうことにしようと言つて出したものです。やはり役に立つということが大事だと。すごく簡単な言い方ですけども。でも

我々こんな役に立つ機能を持っていますということでは、半分にしかならない。もう半分は何かと言うと、そういう機能をきちんと持つていて、例えば日頃は行かなくても、いざというときには図書館に行つたら何とかなりそうだというイメージを、どれだけ住民が持つてくれているか。そこまで持つて行かないと、やはり図書館が本当の評価を受けることは出来ないと思います。

教育機関の枠を越えた情報提供機関

なぜ「教育機関の枠を越えた」という言葉なのか。図書館が情報提供するところだというのは皆さんなんとなく分かつていただけなのですが、情報提供という機能やそれにより狙う効果を狭い意味の教育機関や教育的効果という枠の中だけでとらえられると、図書館が持つポテンシャルが最大限に発揮できないのではないかと思うからです。

例えばビジネス支援ということが今よく言われますが、うちの例で言うと、ビジネス支援というような中身、あるいはそれによる効果を、教育委員会がコストパフォーマンスも含めて評価できるかと言うと、それは難しいと思います。

我々のところでは、大学との協力関係をふくめていろ

んなことをやっています。例えばその一つとして、鳥取県は大学の数が少ないですし、大学の規模も小さいですから、持っている蔵書の量も少ない。だからうちが持っている本と、大学が持っている本との行き来をスムーズにするための物流システムづくりとか、ブックポストを置いてもっと大学生の利便性を高めるということをやっています。

それを教育機関的な目で見るのだったら、図書館にな
い本が借りられるという言い方ですよ。だけでもう少し引いて県政全体を視野に入れて見ると、地方における国立大学の果たしている大きな役割に気がつきます。産業面でもそうですし、いろんな分野で地域の活性化のために大学は必要な存在です。

それが今年から独立行政法人になりました。大学の浮沈、なったとたんに、もう地域間競争なわけです。大学間競争、地域間競争がでてる。そのときに、例えば、京都には大きな大学がたくさんあって、例えば立命館大学は年間七億ぐらいを情報関係の経費に投入して、あらゆるものをうちだったら提供できますよと豪語している。例えばそういうところと、同志社だ、京大だというのがちゃんと協力し合って、本のやり取りをしているから、京都の大学の教官とか学生は資料についての不満を持た

ずにいろんなことが出来る。

ただどうちの県の鳥大の人はどうだろうか。鳥大単独の持っている本代はそう大きくありません。その中で十分なもの提供できるかと言うと出来ない。どうなるかと言うと、難しい本は研究機関として必要だから買います。しかし学生が入ったときに必要な、初歩的な、あるいは中級ぐらいの専門書は、実際地方の大学はなかなか買ってもらえないという状況だと思います。県立図書館はそういう資料を豊富に持っているから、それでカバーすることによって、それも出来るだけストレス無く使えるようなカバーの仕方をすることによって、大学の学生が喜ぶ。

要はそうしたやり方で鳥大に来てもそういう不満を感じずに済むとするならば、大学の学生の質が落ちたり、あるいは教官が不満を持ってよそに出たりすることを若干でも県立図書館が食い止められる可能性があると思うんです。でもその評価を教育委員会が出来るかと言うとそれは教育委員会ではなくて、高等教育機関の担当部署のほうが高く評価してくれます。今うちでは総務部が担当しています。そういうところの人間は、そういうサポートを県立図書館がやるということになると、ああそれは非常にいいことですねということをお分りしてくれる。

だから教育機関という枠の中だけでの効果ということを考えず、行政全般というぐらいの幅広なところで、図書館はどういう活躍が出来るのか、どういう情報提供によって地域の活性化につながるのかという考え方をしないと、図書館自身が自分の枠をぐっと狭めてものを考えてしまうということにつながるのではないか。

韓国、中国の急速な変化

このあいだ韓国に行ってきました。韓国、中国については以前から注目しているのですが、非常に元気がいいです。韓国は皆さんすでにご存じだと思いますが、ハイブリッド化を非常に進めています。出版の件数で言うところとしても日本より少ないですから、一つの館が持っている本の冊数も少ない。

だけと本と併せて、それこそブロードバンドが世界一普及している国ですから、そういったブロードバンドを最大限に利用して、データベースへのアクセスだとか、さまざまな資料の提供をIT機材を使って提供する。それを一つの館の中で提供するというところで図書館がさまざまな形の取り組みをやっている。

韓国は通貨危機とか経済危機で相当打撃を食らった中で、自分の国をこれから良くしていく上で情報が非常に

重要なものだと考えたと思います。そのうえで図書館をその拠点として位置づけたのではないか。そう思っているのですが、向こうに行って実感しました。

財政があれだけ厳しい時に、図書館に力を入れていたわけです。本当に厳しい時期がありましたから。我々も韓国といろいろな交流をしていますが、一時期パタツと向こうから人が来なくなつた。予算が付かないからこんな時期に日本に行っていたら周りから非難されるといった雰囲気だつたと思うんです。でもそんな時期でも、彼らは図書館をつくつたり、図書館の中にそういった機能を付加し続けていたのです。

そうやってがんばって情報提供機能を国全体でつくろうとしているところと、言っちゃなんですが、日本のこれから何年か後を考えたときに、本当に彼らと対等に張り合えるのだろうか。特に我々より後の世代の人たちはいま韓国はいろんなやり方で学校と組むこともやり始めています。

そして自分で一部のお金を支払って、利用権を得た有料の講座やデータベースを図書館の設備を使って見るというようなことも含めて、若い人たちはかなり多様な使い方をしている。そういう国と、古色蒼然たると言ったら悪いですが、活字メディアだけしか扱っていない図書

館がまだまだ多い我が国とを比較すると、ちょっとこれでは置いて行かれちゃうんじゃないかという危惧も持ちました。

中国は皆さんよくご存じだと思いますが、上海の図書館です。一度行きたいと思っていますが、日本の国立国会図書館と同じようなものを上海市一市でつくった。上海がつくるのもやはり情報だと思います。上海が香港と並ぶ、あるいはそれを超えるような金融都市になろうとするのだったら、あそこでどれぐらいの情報を集めて、どれぐらいの情報をきちんと提供できるかということぐらいいは行政としては考えられると思います。そうした流れの中でやはり図書館を考えているのではないか。これは推測ですけども。

なぜここで中国、韓国を引っ張り出すかと言うと、図書館の中の議論ではいつも欧米が出て来るからです。アメリカではどうだ、イギリスではどうだという議論が出てくる。それ自身が間違いだとは思いません。しかしそれを例えば我々のような田舎にいて、例えば首長さん方といういろいろなお話をさせてもらうときに、アメリカとかイギリスとか言っても、「それはまあ長い歴史の中でそうなるけんあ」みたいな受けとられ方ですよ。

要は自分たちのところとは別の世界のような感じがあ

るわけです。だから切実感がない。「そこはそうだけど、日本はこれでやれて来とるんだから」みたいな感じですが、だけでもよく考えてくださいよと。お隣の韓国と中国が、いま言ったように、ここ数年間の間にこれだけ劇的に図書館を使った情報提供を一生懸命やって、それがあ意味、国策的なものになっている。そういう状況の中で子供たちが育てられていくのに、日本ではそういうことが学べないという状況がもし出てくるとしたらどうなるか。これから十年後に今の子供たちが大きくなったときに、それぞれの国で、地方でどういう差が出てくるかです。

何度も言いますが大都市はまだましです。まだほかにツールがあるから。田舎であればあるほど、図書館を含めて情報に関するものがきちんと提供されないということが、どういう影響をこれから与えていくかというような話をするとき意外に反応があります。中国、韓国は行ったことのある人が多いのです。うちの県は特に環日本海交流をやっている市町村が多いからそうなのですが、そうなのかと驚く感じですよ。そのへんのことをもっと理解してもらう努力を図書館の業界の人間はしなければいけない。

図書館のマネージメントの欠落

これは全国すべての問題だとは言いませんが、図書館の場合はある意味お客さんがコンスタントに来るということがネックになっているのかもしれない。十全なマネージメントをしなくても、そこそこお客さんが来てくれるということが問題点を見えなくしているのではないか。

マネージメントと言っても、人によっていろんな見方もあるでしょうが、要は普通の会社と同じです。自分のところにどういう資産があつて、どういう優位なものを持つていて、どういう点が弱いか。我々の向こう側にいるお客さんは、どういうお客さんで、どういうものを求めているか。来る人たちと来ない人たちが（県立の場合は来られない人も）いるから、来ない（来られない）人たちに對してはどういう形でアピールして、図書館は様々に使えるものだということをきちんと理解してもらえるか。簡単に言うとなんな話になるのかもしれない。そうしたことを、どうしても有限な資産の中でやらなければいけないので、人とお金のコストパフォーマンスを考えて、配分の仕方や事業の組み合わせを考える。大ざっぱに言うとなんな話なのだと思います。そういったマネージメントの訓練が図書館でこれまでなされて来ただろうか。

予算や組織のことで言うと、図書館の職員はそういう

ことを、これまで前面に立つてやらせてもらったことがほとんどないのです。県で言うと、それはまず主管課に話をして、主管課が財政や他の部署に行つて話をするという間接的な形でしようし、市町村の場合は教育委員会に話をして、教育委員会のほうでまとめるということで、直接財政当局と厳しい対立やネゴシエーションをやるようなことがなかっただろうと思います。

それをやらずに済んだことは、ある意味幸せなことかもしれません。しかし今の時点で言えば、そういったことを頭に入れた上で、施策として提言していかないと、なかなか事業が採用されるとは思いません。

図書館の資産ということでは、やはり人です。単純に人数ということではなくて、職員のモチベーションがどれぐらいあつて、モチベーションを上げるためにはどういうことをしたらいいのか。それからいま具体的に我々が持つている予算は総額どれぐらいで、どのへんに余裕があつて、どこに余裕がなくて、それはどういう形で埋めることが可能なのか。

また、今までは図書館は単独だとは言いませんが、いわゆる読書会的なものや、読みきかせをしてくれる人の会と共同で事業をやることはありますが、もっと広範囲の協力者というのをあまり求めてこなかったと思うんで

す。しかしさまざまな事業展開をやるうと思えば、協力者をどういう形で見つけてきて、どういう形で協力関係を長持ちするものにしていくことが出来るか。そういったものをきちんと把握する必要があります。

図書館を近くで見えるのではなくて、ちよつと抽象的な言い方で申し訳ないのですけれども、視野全体の中に行政全般が入るぐらいに、離れて見る必要があると思います。その中で、自分の図書館はこれからどういう方向に行こうとするか。うちの図書館は先ほど述べたような役に立つ云々ということと、教育間の枠を超えた方向というのが一つの戦略だと決めたら、それに対応した戦術として、どんなものがあるか。

具体的に、戦術というのは、例えば我々のところで、戦術として考えたことは（これも戦略かもしれませんが）一つはやはり先ほどの図書館のイメージをまず変えたいというのがあります。一本、二本、ポツンポツンと単発で事業を打ってみてもそう簡単には変わりません。我々が幅広く情報提供をすることによって、もつと皆さんの役に立つ図書館になろうとしていますよというのが分かっただけで、事業を集散的に展開していく。

展開すると言っても、人も金もあるんだけれども、それをいろんな戦術を使うことによって、カバーしていっ

たり、埋め合わせをしていく。一つは職員のモチベーションを上げることによって前に出て行く。あるいはいくつかの新しいものを取り込むときに、それに併せて他の事業にも使える予算や人手の確保につながるようなことを埋め込んでいく。そんなことを考えながら戦術を組んでいく。そういうことをやっていかないとけない。

これをやっていく上で特に大事なことは、僕は人だと思っています。人のコストパフォーマンスをどこまで本当にきちんと考えて事業展開をやるか。パフォーマンスを追求するときに、同時多発的にやったほうがパフォーマンスが上がる場合があるんです。

例えばうちの例で一つだけ挙げてみると、メールマガジンを出すと言います。メールマガジンを出すと、やはりいろいろな手間が掛かる。コンテンツを書くのに非常に手間が掛かる、コンテンツを書く手間を出来るだけ省くために一週間の新刊情報をホームページのほうからカバツと持つてきてベタツと貼り付ける。それは簡単ですよね。

今までのホームページに貼り付いた格好だと、実はスピードが遅い。一週間にだいたい六百から七百冊ぐらい新しい本が入るので、それを画面を切り換えながら10冊ずつ見ていくのは非常に面倒くさかった。それをメール

マガジンのほうは比較の見やすい形に直して貼り付けたものだから、新刊情報が非常に取りやすくなった。でもこれは手間が掛かりません。機械的に出来る話です。

それから例えば我々がいろんなところと組んで、いろんなイベントをやるときは、イベント情報をそこに放り込む。イベント情報ですから、これも書く手間はそう多くは掛からないし、メールマガジンによっていろんなイベント情報を提供しますよということは、我々と組む相手からすると、メルिटの一つだと考えてくれるわけです。それはビジネス支援なんかも同じことで、他の団体などが行うビジネス支援の情報も載せていく。

きっちり書かなければいけないのは、一番最後に職員が毎回一人ずつ書くコラムだけです。そこは純粹にこのためだけに必要な手間です。そう考えると、メールマガジンを発行するということによる手間は非常に少なく、逆に今述べたようにほかのものと組み合わせることによって、識者の満足度を上げたり、協力してくれる団体に對してメルिटを提供したりというプラスの部分が出てきます。だからある程度収束して、いろんなものを一気に展開したほうがコストパフォーマンスはかえって良くなる場合があるわけです。そんな考え方をしなきゃいけないと思います。

そのために、先ほどもちよつと触れましたが、図書館の資産についていったい何なのかということを考える必要があります。これはきちんと考えるべきです。図書館に長くいる人に、この図書館が提供できるメルिटについて何だろうと聞くと、例えば専門的なものも含めて本がたくさんありますよ。それを提供できる知識のある司書がいまですよというところまではすぐ出てきますが、その次から何本指が折れるか。

そこまで止まる場合が多いんです。だけどそうじゃないはず。うちの館独自の話でいけば、例えば県庁の真ん前であつて、誰でもあそこだと言ったら分かる場所にあるということもメルिटです。それから一年間延べ四十万人以上。うちの県は人口が六十万人ですから、延べ四十万人来るといふのはそこそこけつこうな動員力です。一日千三百人です。

その人たちは図書館にわざわざ来る人たちだから、例えば情報や何かを提供した場合、ほかの人たちに漫然と提供するよりも、もつと受け取ってくれる確率の高い人たちです。それが一日千三百人。これだってメルिटです。

それから例えばうちにはけつこう広い駐車場が付いているのですが、中心部にあつて駐車場をある程度持つて

いる施設はそう多くはない。また、県立図書館という名前を使うことによって、無名の団体とか個人と組むと、その人たちが独自でPRするよりも、はるかにPRがしやすくなったりする。

それから先ほどのメールマガジンもそうですが、うちの館はこの二月から、こういったビジネス支援も含めてチラシを大量に提供し始めました。例えば千三百人入ってくるところにチラシをワツと目に付くところに並べると、本当に取って行かれる量が半端ではないのです。

最近、国民金融公庫さんや農林水産部とお付き合ひさせていただいています。国民金融公庫さんが持っている起業のためにこういう点に気を付けたらどうですかというようなパンフレットをもらって置いているのですが、これはものすごくよく売れます。金融公庫さんがびっくりするぐらい売れます。

農業の分野でも、農業を始めようとする人たち向けのパンフレットがどんどん出ている。普通、行政の人たちは、そういうのをつくるどころまでは上手だけれども、配るのはあまり上手じゃない。一方、うちにはたくさんの人の人が来ていてその人たちに資料を持って帰ってもらえるということは、それだけのメリットを我々は提供出来る。すなわちそれが資産だということです。

あるいは、ある程度面積のある会議室を持っているとか、そういうことも含めて、私の図書館はどんな資産を持っているかというのを一回きちんと棚卸しする必要があります。棚卸しの中で、いま提供できるものと、ちよつと手を加えたらよくなるものがある。ちよつと手を加えたら出来るものも併せてそのときに考える。相手によって求めるものは全然違います。例えば同じセミナーをやるときでも、大学がうちと組む場合は、彼らはネームバリューなんか必要ないわけです。大学というネームバリューがあるから、県立図書館のネームバリューなんか必要ない。

大学が欲しいのは何か。鳥取大学は市街地からちよつと離れたところにある。今までもセミナーをやっていたけれど、一つは遠いのと、一つは大学の敷居がちよつと高いということ、来る人が少なかったわけです。それならと一緒にやりませんか。我々はPRもやりますし、いい場所にありますから、ここで提供したら人がグツと増えるはずですよ。

独立行政法人になったら、大学は地域に対してどれぐらい貢献しているかということも、たしか補助金の換算の対象になるはずなんです。ならば我々と組めば、それだけ人も来るし、鳥大がそれだけのことをやっている

いうことをみんなに知ってもらえる。それを突き詰めて行けば、彼らが文部科学省に行ったときに、我々はこうやってがんばっているんだということも言えるわけです。そういうものを我々は提供できますよという話をさせていただいて、最終的には一緒に、一年間二十回ほどどうやってもらうようになりました。

やはり人数はグンと増えました。この間は逆に、我々のところと県の事務所をつなぎ、県の事務所で鳥大の医学部がセミナーをやって、うちで映すというやり方を取ったのですが、それでやればさらに多くの人に参加してもらえます。大学単独でやっているときよりも、はるかに多くの人が来てくれるわけです。そういうメリットを私たちは提供できますよとアピールしてゆく。

あるいは同じセミナーでも、例えば労働系の団体があります。雇用・能力開発機構という名前をご存じでしょうか。あまり皆さんご存じないと思うんです。うちの県でもたぶん一般の県民は知らない。けれども、今、労働関係の国の外郭団体というのは、これだけ雇用情勢が厳しいから、いろんな事業を展開して、少しでも就業の機会を増やそうと努力をしてるわけです。でも悲しいかなネームバリューがない。

だから彼らはどうするかと言うと、自分たちのところ

に来てくださいと言っても人が来てくれないものですから、市内の交通の便のいいホテルとかに場所を借りて、そこでセミナーをやるわけです。金もかかる。それがいだったらうちでやったらどうですかということです。うちでやったら、場所がよく分かるし、県立図書館と共催ということになればネームバリューだって使えます。

実際にやってみると、鳥取県の三カ所と同じセミナーをやって、その三カ所のうち、県立図書館の場合、他の二カ所の二倍の人が来たんです。彼らが想定したよりもかなり多く、資料が足りないほどだった。だから図書館と組むことによって、そういうプラスが出ますよと。

さらに言えば、これは絶対外したくないのですが、図書館が持っている本や雑誌で、当日の内容がさらによくわかるもののリストを配ります。もう一步深く我々は情報提供できますよ。もちろん一部ですけれども。こんな本があつたり、新聞や雑誌で言うところなんものがありますよと。データベースだって使えますよと。

裏返すと図書館の中の見取り図です。どこにどんな本がありますよ。どこにインターネットが使える場所がありますよということが一目でわかる。こういうものをセミナーに來られた方に、それぞれの内容に応じたものを配るんです。これを提供することが図書館でやることの

一つのメリットです。図書館でないと提供できないメリットです。だから来られたお客様に、ある団体が単独でやるよりも、図書館と一緒にやると、もう一步深い情報提供することによって顧客の満足度がもう一段上がるはずだと我々は考えているわけです。

一方、我々も単独で実施しようと思うといういろいろな難しいことがあります。例えて言う、大学が提供するようなセミナー、あるいは労働関係の団体が就業のために開催するセミナーは、まず内容を考え付くのが大変なのです。それに合った人を探して来るのがまた大変。その人と交渉しなきゃいけないということも含めると、一つのセミナーを状況を十分把握していない者がやることはとても大変なのです。だからお互いがちょうど欠落していることと提供できることがうまく合う相手を探して来て、一緒にやることによって、お互いにすごく効果が上がるような情報提供が出来るということです。

これは本とは直接関係ないように見えるかもしれませんが、やはり図書館というものを総合的に見て、仕事で使ったり、暮らしの中でこういうことを解決したいんだという人たちをもっと惹き付けるためには、こういうような形によって、「図書館が多様な情報を提供しているから来てくれませんか、来てみると良い情報が提供され

ますよ」ということを、もっとアピールしていかなければいけない。

そういうことは今まで出来ないと思っていたかもしれない。でもうちは今年一年間で五十本以上新しいセミナーをやっています。図書館の人間だけでやろうと思ったら、そんなもの出来るはずがありません。しかし、一つひとつの団体に、我々はこんなものが提供できますよという話をさせていただいてお互いに相手が欲しいものを提供しあえることを納得し、協力するからこそできるんです。我々は基本にお断りをしません。お願いではなくて、我々が提供できるものを、あなたたちが上手に使いませんか、使ってお互いがメリットがあるようなことが出来ませんかというような提案をさせてもらっています。そうしてメリットを納得していれば、人が変わって継続されると思うからです。

何よりも職員モチベーション

まず図書館の職員です。うちの場合は、私が来る前は若干知事との行き違いやなんかもあったりして、モチベーションが下がった状態がありました。ただ、うちの職員がその時点で良かった点は、その状態を良しとせず、その状態に対して、もう少しなんとかならないかという

ような形で不満を持っていたということです。

不満を持っているということは、きちんとした目標と、それからこういうふうによればこうなるという流れをきちんと示せば、前に向かって動く可能性が非常に高いということだと思うのです。例えばあなたのところで一番重視しているのは何と言ったら、お客様の満足ですと応えなきゃいけないのかもしれませんが、私其实是重視しているのは職員のモチベーションをどこまで高くできるかということです。

それがなぜ大切かと言うと、さつきから何度も言っている新規事業を集中的に展開しようとするときに、モチベーションが高くない状態で新規事業を投入したらどうなるか。結局中途半端になるのです。どっちも中途半端になる。従来の事業も中途半端になるし、新しい事業も中途半端で、結局不満だけが残る。不満というのはユーザー側の不満です。今までと比べて十分にやってくれなくなつた。新しいことをやり始めたけれども、あれでは問題点が多過ぎるじゃないかみたい。それをどこまで埋められるかというのは、やはり個々の職員のモチベーションだと思うのです。

いろいろな形で日常的に考えを伝えるのですが、たまに講座の形で職員に話します。全体が見えないとモチベ

ーションが अगर ないので。最初は私が館長になつた十四年四月の月末休館日に、当時の事務の次長から一時間時間をやるから何かしゃべらないかと言われて。

今どう見られていると思うか。いま本当に危機だと思ふけれども、外からはマイナスのイメージで見られている部分があるけれども、逆にそういう見られ方をしているときだからこそ、良いものをボンと出すことによつて注目される度合いはもつと大きいと捉えてほしい。それから大事なのは自分たちの目の前にお客さんがいて、そのお客さんたちに対して一生懸命仕事をするのは悪いことじゃなくて良いことです。だけどそれでおしまいだと思つたらちよつと違うよということです。

そうではなくて、例えばうちは延べ四十万人の人が入るけれども、絶対数で言うとうと六、七万人。六十万人の県民とすると、うちに来ていただくのは十分の一ぐらいです。ということは向こう側に十分の九の来ないお客さんたちがいるわけです。その来ないお客さんたちに、県立図書館というのはいざとなつたら使えるところだと分かつてもらえるか。そのところも少し頭の中に置いて欲しいということです。そのためにはきちんと情報公開して県民に対してPRしていかなければいけない。

それから「鳥取県立図書館とは今どこにいて、何を目

指しているのか」というタイトルで平成十六年三月に再び話しました。言っていることは多少変わってきていますが、「変化の方向性」ということを最重点にして、CUBE（キューブ）という考え方でやりましょうということを出したのです。CUBEという考え方についてはこのあと説明させていただきます。

また「図書館はなぜ必要か」「図書館の役割を再検討する」という題で十六年四月に非常勤の職員に話をしました。これはうちに非常勤の職員さんが増えてきたものですから、非常勤の職員に対して、我々がどういう考え方で、どういう方向にゆこうとしているのかということとなかなか徹底しにくかった。それで一度その人たちだけ集まってもらって、あなたたちがいま仕事をしている図書館というのはどういう役割を担っていて、どういうふうに考えて動こうしているのかということの説明をしたのです。

モチベーションを上げるため、知事や学者さんを上手に使ったり、マスコミにお願いすることもあります。例えばいろんな新しい活動をやっていて、マスコミが評価してくれる。それはやはりモチベーションが上がります。それから知事にかなり早い時期から働きかけをしています。先ほと言いましたようにかつて知事と多少の行き

違いがありました。本当は知事も図書館が好きで、うちの職員も図書館をなんとかしたいと思っているのに、行き違いがちよっとあつたわけです。これをなんとか解消したい。両方が同じ方向を向くようにしたいということがあつて、何度かメールでやり取りしていましたが、一年ぐらいたった時点で、教育長にも尽力してもらい一つのエポックメイキングとなる、知事との飲み会をやりました。

出席者は知事と教育長と私と生涯学習課長。あとはうちの司書だけです。事務職は入っていません。要は濃い人間だけが集まってちよっと一回話をしようというような場面です。飲み会です。小さな西洋居酒屋を貸し切りにして六時スタート、八時終了の予定でやることになりました。

事前の仕込みとしてじつは司書に言いたいことを全部書いてくれと指示しました。たぶん二時間の中では半分は知事がしゃべる。半分はうちの時間だと。でも一時間では言いたいことをみんなが全部言えない。そこで言いたいことを全部前もって書いてもらった。それをA4二枚にまとめて知事に渡そうと。この場で読んでもらわなくてもいいから、家に持って帰って読んでくれと。出す、出さないで教育委員会と少し押し問答をやりましたが、

最終的には出してもいいよという話になって出させてもらった。

それはなぜかと言うと、一時間の中で話しきれなかったときに、まだ不満が残るということがあるから。自分たちはいったいどんな図書館にしようと思っているのか、という点がうれしくて、という点がづらいと思うのか、ということを書いて知事に持って帰ってもらった。

それを先に仕込んで六時に話が始まりました。知事も言います、うちの司書も言います。教育長はときどき口を挟む。僕は行事役と言うか司会役です。生涯学習課長は何も言わずにメモを取っている。あとは司書と知事とがやり取りする。知事もずいぶん乗ってくれて、予定を大きく超え、九時半ぐらいまで、三時間半延々とやりました。うちの場合、司書は女性の職員が多いので、ふだんの飲み会はずぐ解散となるのですが、その日は知事が帰っても十一時過ぎるぐらいまで、その場所でワーワーやっていた。

みんなある意味興奮していました。こうやって知事とやり取りをして、知事の考え方もよく分かったし、ある程度認められていることもよく分かった。そうするとモチベーションががらりと変わります。そんな機会をつくるべきだと思うんです。図書館の職員というのはある意

味孤立しているんじゃないか。市町村でも、例えば教育長や首長さんとそうやって、図書館がどういうことを考えてがんばろうとしているのかを話す機会があるだろうか。そういうことがあると本当にやる気が出ると思うんです。

事業展開の考え方と実際

それから大研修室を不良資産から優良資産に変えました。百二十人ぐらい入る大研修室が二階にあるのですが、稼働率が非常に低かった。私が行って十日目ぐらいに本監査というのがあって、あそこは稼働率が悪いから高校生に勉強部屋として貸したらどうかという話が出た。うちの職員は、「いやそうじゃなくて、あれは図書館のいろんな行事をやるためにもとつくつてもらったんだ」という。

だけどその理由ではもうやれないですよ。稼働率がずっと低いということ。だからそのときに、そういう過去の理由じゃなくて、もっと前向きに、例えば今まで図書館活動以外の利用について非常に高かった障壁を下げて、もっと生涯学習のための情報提供施設として活用するようなことを考えますという言い方をすれば、自習室にしないでいいと思う。従来の理由では、監査の言う

ことのほうが一般の人は受け入れやすいというようなことを話しました。それで今は、いろんなタイアップのときに提供できる優良資産に変わっています。

一つの中の大きな転換点として、平成十四年に県立高校に常勤の司書が入り始めたということがあります。

その前の年、平成十三年に私は教育委員会の総務課長という立場でした。教育委員会の組織とか人事といったところのポストの一つだったわけです。導入には知事のかなり強い意思があります。知事は非常に読書を推進しようとしていて、一番重視しているのが学校です。学校の図書の貧弱さに対して、何とかならないかと。次に市町村の図書館。そして県立図書館の順です。その中で学校に、やはりきちんとした司書を置いて、もっと学校の中で本を提供して読む体制をつくらうという意志が知事にあったのだと思います。

これだけ本当に金がない時期に、三年間でほとんどの全日制高校に司書が入りました。今年も一名補填するための採用試験をやりましたから、来年度の頭の時点ではすべての全日制高校に入ります。正規の司書として採用された職員です。

そのときに、じゃあ県立図書館はどう対応するか。従来の感覚でいけば県立図書館は、教育委員会のほうから、

県立もなにか支援することを考えてくれと言われてから動くことになりがちなのですが、逆にその時点で県立図書館が自発的にどれだけ前向きな施策が提案できるか。その施策を自ら出すことによって、もつといろんなプラスを我々が得ることが出来ないだろうか考える。

高校に正規の司書が入るという。それまでも非常勤の司書はいたのですが、その人たちでは十分に出来なかった。では何が出来ないのか。非常勤の職員では例えば職員会議やなんかで、我々はこういうふうにしたいんだとは普通は言いにくい。だからそれを正規の職員として責任を持たせてやるという形も考えられる。だけど学校という組織はそんなに簡単なものじゃない。例えば高校で言うところの百人ぐらい職員がいて、ほとんど教員ですから、教員の意見というのは非常に強いわけです。

司書が正規の職員に変わったからと言って、たちまち学校がその色に染まるかと言うと、そんなことはない。逆にその人たちがいろいろ言おうとしてみても、今までのような古い書籍やなどがそのままの状態では、活動しようと思ってもなかなか成果が上がりません。成果が上がらないと、そのうち彼らも成果が上がらない状態に慣れてしまいかもしれない。そうなったら非常にもつたない。



それから県立としては、高校は最後のユーザーをつくってくれるための皆だと考えるべきだと思うんです。大学に行ったらレポートを書くために少し勉強させられるかもしれないが、少なくともきちんとした形で読書教育などをやってくれるのは高校が最後だろうと思います。その皆を守る高校の司書ががんばってものを言うために、我々が新しいツールを提供する。そのツールを使つて、「こういうものを与えられたから、これを上手に使つて、こんな教育の展開が出来ませんか」というような提案を彼らがするような環境を我々がつくるべきじゃないのか。

じゃあそのために何が出来るかといえば、市町村の図書館と同じだけの支援を提供すること。それは何かと言うと、リクエストがあつたら、毎日本を宅急便で送るといふようなことなのです。基本的には午前中に注文したら、翌日の午後には学校に届くというシステムです。

それからうちは堅い本が多いので、高校用の柔らかい本を新たに大量に買い込んで、それをセットとして組む。例えば職業に関連するセットだとか、日本文学に関するセットなど。もつと柔らかい、中学生から小学校の高学年ぐらいの生徒が読むような本のセットだとか、そんなものも含めて、いろんなセットをつくつて、それを例えば五百冊分ぐらいを一つの学校に提供する。



そうすると、古い本ばかりではなくて、入口の入ったところに県立図書館から送られてきた新しい本五百冊がドンとあるわけです。それを一学期に一回交換していけば、図書館に行けばいつでも何か新しい本が手に入るといふ状況がつけられるわけです。

それとまた別に大量貸し出しとして学校のほうがテーマを決めて、こういうテーマで二百冊ぐらい貸してくれませんかというものにも対応する。また、彼らが積極的に我々の中に入れるような研修を県立が数多く組んでいく。更に学校にうちの職員が年三、四回は回つて、いろんな相談を受ける。

これぐらいの分厚い支援をやっていくことによって、学校に入った司書が本当に仕事が出来る状況がつけられると思うんです。逆に我々が後ろに下がつて彼らを孤立させてしまつたら、彼らが物心両面でサポートしてもらえない状況の中でどこまでがんばれるかと言うと、やはりそれは難しい。そういう状況の中で成果があがらないことに慣れてしまふ。

いま言ったように、こういう施策を言われてからではなくて、県立図書館のほうから、「今まで我々は高校をサポートしなかったけれども悔い改めました、我々はこれから全面的に支援します」と言つたほうがいい。その

ためにはお金も要るけれども、このお金は付けてもらえるんです。なぜかと言うと、八人、最終的には二十二人も人を付けるということは、その時点で財政当局や教育委員会は相当腹をくくっているわけですよ。

これだけお金のない時期にそれだけの人が付くということは普通ありえない。それを付けるということは相当決断して付けているわけです。決断して付けたものが学校に入れてみたら腐ってしまったという状況は、彼らだって絶対に避けたい。その場合、それを避けられる一つの大きな鍵を県立図書館が握っているわけです。だから我々が出て行くということは、逆に財政当局に、そうかそういうふうによれば、あそこに投資した人は無駄にはならないんだなということを納得してもらえ。

これをやることに關して、今まで大きなネックだったのが物流システムでした。市町村を回るとき、うちは運転手と司書と一緒に相談も受けながら回るといやり方を取っていたわけです。だから一年間に一つの図書館に十回ぐらいしか行けなかった。一カ月一回弱です。

ただ運転手さんの部分と司書の部分を切り離して、物流のほうは民間に委託した。だから数はいくらでも増やせるようになった。運転手さんはどうしたかと言うと、切ったわけじゃありません。この人は長く図書館にいた

人でその時点で五十歳ぐらいです。あなたは運転手で採用されているから、運転手でよそに行ってもいいですし、このままうちにいたいのだったら司書の資格を取りませんか？

司書の資格を取ったら、うちにずっといてがんばってもらいたい。市町村からも彼は慕われているから、居るつもりだったら応援しますよ。よそに行くのだったら行きたいところに斡旋するように努力しますよ。言ったら、彼はここにいたいと言って一生懸命司書の資格を取りました。それも一番難しい筑波大学に行かせて。今で言う筑波に行つて資格を取るのが一番がんばったことになるのですが、そういうところにあえて行かせた。だから彼はいま司書になって仕事をしています。とても一生懸命張り切つて働いています。

それによつて人手も確保できた。大量に物を運ぶシステムが新たに出来た。それ以外もいくつかこれに関連させてメリットを取っているのです。一つ何かをやるときに、戦略的に考えて、これとこれとこれを押さえて、さらにこう発展できるというようなマネージメントを始めた一つのきっかけですね。この高校に司書が入つて、それに対して我々は支援をしていたことが。

先ほど見ていただいた新展開の三枚ものは、平成十四

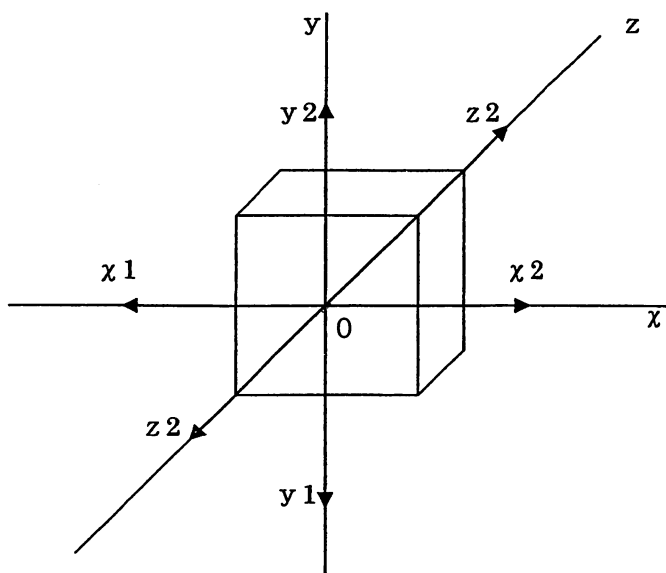


図 1

年七月頃につくった第一回目の改革試案です。我々がどういう方向を向いて動くかということについて、私はこういうふうに思うということを明らかにし、職員からも意見を採る。その中で改革試案をつくっていく。それをみんなに見てもらって、これで我々は行くんだよと。ただしそれは財政当局が別にオーソライズしたものではありません。我々の目標としてのものです。目標と具体事業をはっきりさせて、これとこれをこういうふうに関わり合せてやれば、こういう効果が出るのではないかということとを、ある程度職員が頭の中に置いていけば、やはり目標、モチベーションが出来るという状況になります。

変化の方向性

先程述べましたキューブ（CUBE）について説明します。CUBEという考え方は、別にそんな大層な考え方ではないのです。CUBEというのは勝手に僕が付けた名前です。要は線として広げるような事業展開ではなく、いくつかのものを組み合わせて立体的に広げていくというものです。ご覧いただければある程度分かると思います。

まずゼロの地点にあるものは何かと言うと、今まで図書館で提供されているもの。X軸は情報を提供するとき

のメディアです。メディアでいくとアナログ方向もある、デジタル方向もある。今は本や雑誌が中心だけでも、例えばデジタル方向と言うとＩＴ端末を付けるとか、持っている絵図やあるいは古い本などをデジタル化して提供する。あるいは有料のデータベースを提供する。アナログのほうは何かと言うと、たくさんのセミナーを開催するとか、チラシを集めて来て提供すること。そういう形で、いろんなメディアを使って情報を提供します。

Ｙ軸は、内容の軸です。うちの図書館は子供の本はあったのですが、青少年図書というのは非常に弱かったです。やわらかい本をうちがあまり入れると、市町村の図書館のパイを食ってしまうような危険もあったものですから、あまり無かったのです。でも流れとして、それがネックになっているところがあって、青少年図書をこれからある程度入れようという一方の方向がある。もう一方の方向は、これまでも入れてきましたが、比較的高度な専門書ももっときちんと提供しよう。あるいは提供していることを分かってもらおうという内容的な軸です。

Ｚ軸は、支援協力。いろんなことをやろうと思っても、うちが単独では出来ない。だから相互に支援協力をやっ

てもらおう軸を一つ設定した。片方は個人のボランティアの方向。これは平成十四年から入ってもらおうようになりました。例えばボランティアの中にも、ＩＴボランティアというのがあります。インターネット端末をこの四月から入れましたが、我々の職員がいちいち教えるのは人手がいくらあっても足りないので、一週間のうち三日間、それぞれ二時間ずつ時間を設定して、その時間にボランティアの人が来てくれる。待っていてくれる。だからまったく初心者の人たちはその時間に来てくださいと案内します。土曜日の設定もあります。そういうときに来てもらえば、使えない人でもちゃんと親切に教えてもらえますということ。例えばそういうボランティア。もう一方は、団体とか組織とかということでずらずらと書いています。

例えば支援協力でも、先ほど言いましたように商工だとか労働というのは、いわゆる国の外郭団体とか、そういうところばかりではありません。これから先、図書館としての狙い目だと思っているのが、一つは銀行です。銀行でも地銀です。国民金融公庫さんも対象なのですが、地銀がなぜ我々のパートナーになり得るかと言うと、彼らにはいわゆるシンクタンク的な部分、地方に対していろいろな調査をやっている部門がたいがいあるか

からです。

そこが実はいろんな良い研究をやっているのです。委託研究なんかも含めて。だからそこで彼らが得ている情報を、我々と組むことによって、もつと地域に還元できないだろうか。今まで彼らも還元していかないわけじゃない。でもやっている場所が銀行のビルの会議室なんかだと、一般の人たちには敷居が高いんですね。だったら我々と一緒に組んでやりましょうよという話です。

一部の銀行からはすでにけっこう前向きな反応を得ていますので、たぶん近い内に実現すると思います。あと試験研究機関や行政といったところも、やはりそういったことが上手じゃないので、うちと一緒に組むことによって、情報提供することが出来ないだろうか。そんなことも考えています。

今ずっとお話ししたように、図書館が持っている内在的な力というのはかなり幅広にあると思います。それをどういうふうに使ってマネジメントしてプランニングして提供することが出来るか。私はいま館長という立場ですが、館長という言葉の中に何が含まれるかと言うと、やはりマネージャーが一番ですよ。

モチベーションをどうやって出していくか。どうすれば職員が最大限の力を出すことが出来るのか。他にも館

長の役割はいろいろあって、例えばいま言ったような新規事業は全部自分が出来るわけじゃないから、こういうことはどうだろうかという球を投げるという意味でのプランナー。それからプロデューサー。プロデューサーという面で言うと、銀行と組んでもし良かったとしたら、うちのところだけでやる必要はないのです。県内のある程度有力な公立図書館にこういうセミナーは皆非常に喜ぶよと言ってパッケージで提供することが出来ます。そういうことも含めてプロデュースすることが必要だということですよ。

これは余計な話かもしれませんが、戦闘要員というものもあります。「館長はガンガン戦えよ」っていう感じなんです。先ほど知事は図書館に対して思いがあると言いました。確かにそうだけれども、でも知事がそうだからといって、ホイホイと金を付けてくれるほど財政は甘いものじゃありません。やはり我々が財政や教育委員会と話し合いをやって、切り結んで、その中で事業を一つひとつ確立していくわけです。そういう意味での戦闘要員だということですよ。

もう一つは広報官。図書館に来る人たちだけが、いい事業だなと言っているのでは半分だと思っんです。そうではなくて、こういう事業をやっているということを、

もつと来ない人にきちんと提供する。例えばビジネス支援なんかはまさにそうです。普段は来られていなくても、何かあったときに図書館に行ったらこういう資料があつて、いろいろな本が見られるんだということを、どこまできちんと浸透させることが出来るか。そういう意味で、広報というのは非常に大事な要素だと思います。

そういうことを含めて、いま本来は図書館が持つていくはずのポテンシャルをどれぐらい本当にきちんと引き出せるか。いま館長の仕事について言いましたが、それは僕の立場だからです。それは館長だけじゃなく図書館の人間が全部で考えなければいけないことなんです。そういうことをこれから先二年の間に、本当に出来て、もう一步前に進んだ図書館に変わるのか。それともどんな体力を失つていつて、新しい事業も展開できなくなるのか。そういう意味での大きな分かれ目になるのではないかと思います。これで一応、私の講演を終わらせていただきます。

人文会 ありがとうございます。それでは二、三質問させていただきます。高校に常勤司書が勤務している県立、今度は二十二校でやるとおっしゃいました。それをやった八校ですか、その高校で生徒さんに何か変化はありましたか。

齋藤 一律ではないということをまず前提として言っておきます。実は一番効果があつたのは、うちから職員が行つた学校なんです。八人入れたときに、うちからも一人異動させました。私が総務課長のときに、初めて学校採用があつたので、それまで異動がありえなかつた県立図書館も含め、これから先は異動があるのだということ、県立から一人出すということを決めました。

その人が行つた学校は工業高校で、校長さんが言うには、「なかなかうちの生徒は本を読まないんだよ」という話だつたんです。我々が関わるようになると言うか、その人が行く前の平成十三年度は図書館全体の貸し出しが一年間で二百五十数冊。一ヵ月二十冊ぐらいですから一日一冊ですよ。読まないという言葉がよく分かります。だけど平成十六年度は四月一ヵ月で六百数十冊の本が貸し出されている。元の数が小さいので、すごい倍率になっています。

そうなつてくると学校全体の意識が変わるんです。図書館のための委員会みたいなものを組織してくれたり、今年の夏に至つては、「自分は図書館がとても好きなので、図書館でバイトをさせてもらえないか」と名乗り出た生徒があつて、僕のところと相談があつた。

実はうちは大学生しかこれまで採つてきていません。

ますが、具体的なこの貸出率。データ、資料をそのときに、そういう人たちがどのくらい借りているのか。

齋藤 そこまではやっていないです。データを取るということについては実は割といい加減なんです。申し訳ないですけど、データを取る人手がもったいないので。多少余力が無いとデータは取れません。ですから今のところは、入館者や貸し出しの伸び、あるいはセミナーにどれぐらい人が入ってくれるかということをもつて、効果が上がったというふうに外に向かつては言っている状態です。まだそういう意味で、評価するところまでは出来ていません。

人文会 鳥取県立図書館は、齋藤館長のような方が館長になられて、非常にいろんなものをやられています、ほかの自治体でもそういうことは目指せば出来るものなのか。予算も県全体の半分ぐらいという、恵まれたラッキーな例なのか。ほかの自治体でも目指せばそういうものが出来ていくのか。

齋藤 僕は出来ると思うんです。私がいرونなところを経験しているということがあります。しかし行政職であれば、そんなにめっちゃ違うとは思わないのです。ちゃんとやる気があつて、やれば出来るはずです。私には逆に不利な条件もあります。鳥取県はよく一年間で人

が替わるんです。私は一応管理職ですが、管理職は一年で替わる人が五割以上です。二年たつたらほぼ全滅するんです。僕はいま三年目ですが、三年目というのは本来に数が少ないんです。

そういう状況ですから、一年間で成果を取らなければいけないというのは、かなりきつかったですね。これが最初から三年間時間を与えてもらつて、これでがんばれと言われたら、もつとやりようがあつたと思う部分はあります。一年間で効果をあげるために、司書の資格を取りました。うちの職員や図書館の関係者から筑波で司書の資格を取って欲しいとかなり強く言われましたので、二ヵ月ロスになるけれども、そこを逆にロスにせずにプラスに出来ると思つて取りに行きました。

私は当初、教育委員会から管理するために来たと思われている部分があつたものですから、そうではなくて、私はあなたたちと一緒にこの図書館を良くしたいんだよというのを表す手段として、司書の資格を取ることが一番良かったのです。

退職前に来られる館長さんつてけっこう多いんです。でもそれにはいい点が二つあると思うんです。一つは、僕よりもずっと長い年数しかも高い地位でやっているから人脈がもつと豊富にあるはず。それからやめるま

で、あと二年とか三年と分かっているわけだから、僕みたいになんてやらなきゃと思っていて、あれ二年目だということのようなことはないわけでしょう。だから、きちんと自分なりに戦略を組んで実行すれば出来るはずです。

確かに一億円の資料費があつたというのは事業を展開する上ですごくラッキーでした。だけど逆に一億守らなきゃいけないというプレッシャーがありますよね。さっきも言いましたが、ある意味、分不相応と言われかねない金額なわけです。それだけ持っているということはとても目を付けられやすい。

目を付けられて、一億一千万あつたやつが二千万減らせないかというような論議になると、私は非常に困ります。それに対しての万人が納得する答えを出せないだけど去年の一億一千万よりも今年の一億一千万のほうで、貸し出しの対象者もこれだけ増えましたよ。使い方もこれだけ新しい使い方が出来ましたよと。だから去年よりも今年、今年よりも来年のほうがコストパフォーマンスはいいんですよという言い方だったら出来るんです。人文会 コストパフォーマンスが効率良くなった場合、もつとコストパフォーマンスを追求して予算を減らせないかという感じもあながち出かねない。

齋藤 出るかもしれませんがね。出させないために……。

人文会 新しく事業を興すわけですか。

齋藤 今日はこういうメンバーでしたので予算の話はしませんでしたが、実は図書館の職員というのは予算の話を本当に分かっていない部分が多いんです。図書館だけでなく、教育委員会そのものも、そうだったりもするのですけれども。先ほどの話の関連で言えば、新しい事業の予算は少額な方が付きやすいというものではない。そうではなくて、最終的に例えば首長さんとか議会から言うところ、自分のところの住民に、夢を与えるものとか、こんなみんな喜ぶいい施策が出来るんだというようなものに対してはお金を本当は付けたいわけですよ。

そうするためには削り込んでしまうよりも、少し膨らませて、「予算はもつと掛かるかもしれませんが、どうですかこれ。こういうのを住民に提供したらとても喜ばれると思いますか」というような形の予算のほうの方が本当は付くんです。それが分かってなかったりする。

それから例えば僕が元財政課というだけで金を付けられるかと言うと、そんなことはない。今年も財政課の担当者とは二人とも替わりましたから、五月に図書館に呼んで、あなたたちの頭の中にある図書館像は古い、今の図書館はこうなんだと二時間ぐらいバツと話をして、四十分ぐらい館の中を連れて歩いて、それで頭の中を一回

切り換える。

次のステップとして、そのうちの一人を連れてデイスカパー図書館に行く。うちの知事が基調講演をやるから聞きに行こうと言って連れて行く。そのあと浦安の図書館に行つて、向こうの副館長との話し合いを二時間ぐらい聞かせる。そこまでやると、この人の図書館に対する考え方はパーンと変わるんです。

そうすると僕が言っていることを理解してもらえるわけ。そういう努力はしなきゃいけないんです。それをしないで財政は分かってくれないと言つても、それは仕方がないんです。ある日突然、例えば十一月に予算書を出すということがあるとすると、それまで何もしないで予算書を出して、それで付けてもらえるかと言つと、それは甘い。図書館というのはこんなものなんだこういう力

があるんだという共通の認識がまず出来ていたら、これはこういう流れの中で必要な予算なんだと分かつてもらえるわけです。

でも予算書を出すときに、そうした努力なしでハイと出したら、彼ら自分たちの持つ古い図書館像で査定しますから普通切りますよね。それじゃ予算は付かないんです。だからそういう努力をやりさえすれば、僕はなんとかなると思うんです。

人文会 今日には本当に忙しい中、ありがとうございます。

(この講演は二〇〇四年十一月二十六日に収録したものです。なお、講演者の斎藤氏は二〇〇五年三月より鳥取県立図書館々長を退任され、鳥取県立自治研修所長に異動になりました。)

開かれた〈人文書〉へ

——リプロ池袋店人文会フェア関連企画トーク・セッション報告

西谷 能英

昨年の十二月、東京のリプロ池袋店で三週間にわたって人文会フェアがおこなわれた。「人文会ことしの一〇〇冊」「こだわりの一〇〇冊」などと銘打ったイベント・コーナーのほかに、編集者等による手書きポップ付き思入れ本ワゴンセールなど、いろいろな試みを仕掛けてみた。事前告知がやや遅れたこともあって、その結果はかならずしも満足のいくものではなかったようだが、こうした種類の試みは簡単に結果が出やすいものではないので、今後もしぶとく続けていってもらいたい。

また、このフェアの関連企画として、西武コミュニケーション・カレッジの教室を利用して、人文会主催トーク・セッション「編集者が語る人文書の現在」が十二月十六日におこなわれた。メンバーには、岩川哲司氏（筑摩書房）、羽鳥和芳氏（東京大学出版会）、松井純氏（平凡社）、尾方邦雄氏（みすず書房）のほか、わたしが司会

進行役として参加した。この一文はその報告をかねた、〈人文書〉にかかわることのむずかしさとおもしろさ、今後の可能性にかんするわたしの意見と感想である。

このトーク・セッションの成立にかんするいきさつとしては、関係各位にわたしが事前に送付した趣意書がひととおり説明していると思うので、まずはそれを引いておきたい。

《今回の企画は、人文書編集者の何人かが集まり、それぞれの経験を通じて、人文書の編集についてさまざまな角度から語り合うなかで、人文書の魅力と可能性を探り出したいというものです。この案には、「人文書のリプロ」としての実績をふまえ、さらに新しい人文書の読者を広げたいというリプロ池袋店の願いもこめられています。人文会としてはこの要望にぜひお応えしたいという事で、販売委員会企画グループが中心になって検討

をすすめてまいりました。／その結果として、人文会會員社の編集者に協力してもらい、人文書の読者とかに接しながら人文書の世界について編集経験や裏話などもまじえたトーク・セッションができれば、おもしろいのではないかという結論にいたりました。そこで人文会のメンバーでもある未来社の西谷が司会進行役になることを前提に企画の具体化をすすめております。人選にかんしましては、あまりむずかしく考えず、西谷が知り合いの編集者を中心にお声をかけさせてもらった結果、上記のようなメンバーで実現しようという運びになりました。各位におかれましてはよろしくご了承のほどお願い申し上げます。》

というわけで、早い話が人選から議論内容までわたしに丸投げされた以上、多少の偏りや独断専行はお許しいただきたいという牽制球なのである。その結果として、年齢的にも性別的にも、得意のジャンルにもある種の類似性が出てしまったが、これはやむをえないことである。というか、へ人文書 編集者というのはいさゝか異質すぎると語り合うことはむずかしいし、まして公開の場ではまず議論が噛み合うことはできないだろうからである。さて、そうしたいろいろな条件のなかで始まったトーク・セッションであるが、一〇〇人を超える聴衆を得て

なんとか格好だけはついたというところだろうか。人文書とはどういうジャンルか、という定義づけの話からはじまって、定価や部数設定、どんな基準をもつて成功した本と見定めるかという編集者の実感、さらには翻訳の賞味期限とか装幀の話など人文書編集の実際にも話が及んだ。とはいえ、人文書について語るというテーマのあいまいさもあり、二時間という時間の短さもあり、司会のまずさもあつて十分にまとまりをつけることができなかった。人文書について一般的に語るよりも、編集者らしく裏話もまじえてもっと具体的な細部をそれぞれ展開してもらったほうがあるいは興味深いものになったかもしれない。しかし放談がかならずしも意味のあるものになるわけではないので、議論をなんとか筋道立てようとしたしは司会として、また人文会やリプロの立場も考慮せざるをえない立場から四苦八苦する羽目になった。最初から人文書とは何であるか、などと議論してみても結論が出るはずはないのである。

編集者はほんらい裏方的な職能身分でもあるので、公開の場はあまり似合わない。編集者はその編集した本によつて語るしかないのである。しかしながら、今回参加してもらったひとたちはそれぞれ実績と実力を具えた当代一流の現役編集者であり、事前の打合せ会での話もふ



トーク・セッションの会場

くめて編集者同士としてはとても楽しい意見交換の場をもてたと思っている。トーク・セッションの場がはたしてその雰囲気をごこまで実現し、伝え得たかはそれぞれの判断にまつしかない。

トーク・セッションを通じてうまく展開できたかどうかはともかく、以下にわたしが人文書の企画・編集および販売にかんして日頃考えていることをテーゼふうに簡単にまとめておきたい。もとよりここで言う「人文書」とは理想的なモデルとしてのそれをイメージしていることは言うまでもない。

*

●〈人文書〉はそれぞれの知の専門ジャンルにおいて高度の学問的達成であるべきであり、なおかつ学界内部の流通や評価のみに満足せず、さらにレベルを落とすことなくより広い読者へ向けてみずからを開放する努力をしているものを指す。〈人文書〉はあらゆる知へ開かれたものでなければならぬ。したがってそれは必然的にジャンルを越境する。

●〈人文書〉とは伝統的な人文科学六ジャンル（哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育）のいずれかに所属しうるものでありながら、それらのいずれかに狭く収

まりきらない超越性もしくは横断性をもっている。これらは〈批評・評論〉という別枠ジャンルに括り出されることが望ましい。

●広い意味での哲学的な志向をもつかぎり、文学論（文学批評）や芸術論（芸術批評）も〈人文書〉に包摂される。その場合には〈批評・評論〉というジャンルこそがもつとも適切なジャンルになる。いわゆる社会科学分野にも同じことが言える。

●〈人文書〉のもつとも活気があり話題性もある書物群は、こうして既成のジャンルを突き破って出てきたものであり、その多くは〈批評・評論〉ジャンルに収まる。端的に言えば、〈人文書〉の核心は〈批評・評論〉である。

●その意味では学問や方法論の新しい変化や流行に対応した書物や著者の出現にともない、〈批評・評論〉ジャンル内部のたえざる刷新、切り口の組替えが必要になる。優れた編集者は知の新しい切り口の発見をめざしており、そこから生まれる一連の企画はひとつのジャンルを切り開くことがある。いわば編集者の仕掛けによるデファクト・スタンダードの実現である。

●既成六ジャンルの内部でも小さな地殻変動はある。そうした小さな変化をきちんととらえていくなかで、より

大きな流れが見えてくることもある。

●編集者はこうして実現した企画を販売面でも実績を上げる努力をするべきである。そのためには営業と連携するなり、できれば優れた書店の人文書担当者や情報交換を恒常的にもつのがいい。そうした書店を実験場にさせてもらうよう働きかける必要がある。企画は読者を獲得できなければ編集者のひとりよがりになる可能性が高いからである。

●書店の人文書棚とはナマモノの世界である。人文書担当者はその棚が決して固定的なものではなく、たえざる情報と知識の獲得のなから棚を再構成しなければならぬ。そのためのツールが営業マン、できれば編集者の情報であり、核になる書物の発見であり、それらの本の「あとがき」や「注」「関連文献」等の活用である。

●こうした書店の人文書棚を、より内容のある、より販売効率の高いものにするためには有力書店人文書担当者の協力を得て、〈人文書〉の最新のジャンル構成、マップ作りが必要である。『人文書のすすめ』は歴史的にそうした役割を果たした。これからはその延長上でのたえざるアップデート、本格的な見直しが必要になる。そこから〈人文書〉の未来は開かれてくるだろう。

（に）したに よしひで・未来社

人文会・中国視察旅行

「北京・上海からニーハオ」

九月二日、午後一時三〇分、人文会一行は北京に降りた。第十一回北京国際図書博覧会の視察、北京・上海の大型書店の見学、研修および一部観光をかねた研修旅行である。

北京は超高層ビル建設のラッシュで、古い建物はほとんど解体され、道はクルマで溢れている。高度成長と大量消費が同時に進行しており、二〇〇八年のオリンピックまでには北京、上海などの大都市は景観が一変するに違いない。

ブックフェア会場は活気と熱気に満ちており、登り坂の社会のエネルギに溢れ、昭和四〇年代の日本の出版状況を彷彿させるプログレッシブなパワーを実感した。出版出版社数、中国四七〇社、海外四三〇社、日本は一五二社、入場者数は一〇万人以上。会場での販売はなく版權取引と展示が中心で、場外の一画にバーゲンブースが設置されていた。会場案内、書店研修の調整などでは、

トーハンのデータベースグループの相楽M、海外事業部の小宮部長、朱さんらに大変お世話になりました。

次に訪問したのは、売り場面積四八〇〇坪の北京図書大厦。アジアNo.1の巨大書店である。B1から4Fまでが売り場。社員数五〇〇人、一日の入店者数五万〜六万人、営業時間八時三〇分から二十一時まで。アイテム数三〇万点、仕入れは取次ルートと直取引きの二本立て。直は正味六〇％である。新刊売れ筋の平積みは、日本では見かけない螺旋状に積んで目立つようにしている。売れている分野はビジネス、社会。科学の国の伝統と一人っ子政策に関するもので、教育には金を惜しまないとのこと。また二〇〇八年までには売り場面積を二倍にする工事が始まる。国もでかいが規模もでかすぎて、想像を絶する話である。できあがれば約一万坪の売り場面積となる。以上、ヤンさん（女性のディレクター）の説明を要約。

夜は本場の北京料理を満喫し、紹興酒とビールで長い一日が終わった。ホテル到着の後、シャワーで汗を流しすっきりとした気分。夜の街に消えたのは誰か定かではない。北京二日目は中国の歴史を学ぶ一日。万里の長城、明の十三陵などの世界的文化遺産を見学し、すべてが「途方もない」という言葉を実感した二日間であった。

（以上・文責 藤代俊久）



北京国际图书博览会会场正面



北京图书大厦

そして空路、上海に向かいました。上海は人口二〇〇〇万人を擁する中国最大の都市。未来都市を思わせる超高層ビルとレトロな洋館が共存しています。現地ガイドさんによると、上海人は北京への対抗意識が相当、強いようです。上海こそが何事も一番だという話をバスの中で何度も聞かされました。バスの車窓からは、ユニクロ、パイオニアといった日本企業の工場が見えました。その日の夜は中国茶の試飲を楽しんだ後、遊覧船にて黄浦江を巡り、上海の夜景を見ながら夕食をとりました。

五日は水の都、蘇州を見学。観光地なので高いビルは建てられないそうで、北京、上海の高層ビル群を見たあとでは、かえってほっとします。中国四大名園のひとつ、蓮の葉が池を覆いつくす拙政園、ピサの斜塔のような寺塔がある虎丘、寒山拾得ゆかりの寒山寺を見学。蘇州名産というシルクの工場にも行き、製造過程の説明も受けました。

それから、上海一の書店、上海書城を訪問。俞慧青さん（女性）にお話を伺いました。名刺では共産党の事務主任という肩書きです。店舗を紹介するオールカラー、コート紙で一二ページの立派なパンフレットをもらいました。上海書城グループとして、他に南京店、淮海店、

東方書城の各店舗があります。これも国営です。福州路という書店街に位置するこの書店は、一九九八年のオープン。地上七階建てで、一〇〇〇〇平方メートルの売り場面積があります。年間二億円の売り上げがあり、これは中国で四番目とのことです。一日平均売上高は八〇万円ですが、訪問日前日の九月四日は一六二万元（約二四〇〇万円）を売り上げたそうです。というのも、九月の新学期に入り、学生が本をどんどん買うからとのことでした。前年比一〇パーセントの割合で売り上げが伸びているとのこと、中国の経済成長に本の売り上げも比例しているかのようにです。中国は日本以上に、学歴社会、出世志向の強い社会で、エリートを目指すために本を読んで勉強するという意欲が強いようです。万引きセンサーを出入り口に設置して、高額本に限り万引き防止用のタグをはさんでいるとのことでした。店内は通路を広くとっています。ここは一階に新刊書、ベストセラーを置き、二階以上に専門書を配するという日本でもなじみのある棚構成です。六階はCD、ビデオ類の売り場です。専門書コーナーにも平台があり、棚では面陳展示も行われていました。棚に複数冊をさして入れる北京式とは違い、日本と共通する陳列方式です。店内を見渡すと、手すり際に床に座り込み、タダ読みをしている人が目立ち

メディア・

メディアの生態系を
デザインする

バイオトープ

水越伸

多様でしなやかに、持続可能な
メディア環境作りのための新しい戦略
を提示する。自筆のイラストを使い、
視覚的にわかりやすく解説▼1575円



明治馬券始末

大江志乃夫

日露戦争後の競馬会ブームか
ら馬券廃止までの経緯の中
に、未来の悲劇の予兆を読む、
陸軍秘密文書を駆使しながら描く、
歴史の裏側に隠されたドラマ▼1890円



●ビジョンなき教育改革への鉄槌！

教育不信と

教育依存の時代

広田照幸

歴史的経緯を踏まえた長期的な
視野の議論に定評ある著者が、
現在の教育改革の問題点や教育を論ずる際
に必要な姿勢を平易に説く▼1575円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918 表示価格は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp>

ました。店員は青いジャージの制服を着ていて、規律正しい印象です。見回り巡回している店員も多くいました。店員は二〇〇人もいるそうです。昨今の日本とは違って人減らしという発想はないのでしょうか。歴史コーナーは中国史中心で、他国の歴史書はあまりありません。また人物伝が多いのに驚きました。「偉人」の生涯に学ぼうということでしょうか。『田中真紀子』という本もありました。外国書のコーナーは英米書が多く、アメリカないし、ヨーロッパ指向が強いようです。日本語の本は、外文書店という外国語専門書店に置いてあるそうです。改めて気づいたのですが、本も新聞もすべて横書きです。中国共産党の指導でこうなったそうです。店内に、主要取引出版社名を表示するプレートがあり、出版社とは直接取引が多いようです。ビルの八階以上に、出版社が何社

も入っているそうです。

夜は国営馬技場にて、上海雑技団を見物。予想していたのとは違い、モダンなサーカスという印象でした。最終日の六日は、日本に今もその名が残る、魯迅ゆかりの内山書店跡を訪問。現在は銀行になっているのですが、二階に関連の写真や本を展示する部屋があります。創業者の内山完造が日中友好のために尽力した往時を偲びながら訪問ノートに人文会の名前を記してきました。そして「都市の中にある山水」と呼ばれる庭園、豫園（よえん）を散策。本場の小籠包子を大慌てでつまみつつ、浅草を思わせるショッピング街、豫園商場を散策してから、帰国の途についたのでした。

（以上・文責 馬場正彦）

平成16年度上半期 人文会活動報告(全般)

5・21 第37回(2003年度)人文会総会(熱海後楽園ホテルにて)

会計報告／各委員会活動報告／幹事・委員長選出と各委員会メンバーの編成

有斐閣休会の休会認定／慶応義塾大学出版会入会の承認議決 *活動方針はニュース94号掲載

6・03 人文会2004／年度新役員の取次店への挨拶
まわり

6・17 6月例会(文化産業信用組合本部会議室)

● 通常例会前に啓文堂商品部課長補佐斉藤氏来会。

「吉祥寺店新規出店の説明」。

● 日販、書籍部上間部長、逸見課長、小泉係長来会。

「日販の現状と今後の展望」について報告。

6・25 人文会ニュース93号刊行

6・28～7・13 人文会セット店グループ訪問

札幌・小樽方面(7・1～2)／静岡・名古屋方面(7・2～3)／京都・大阪方面(6・28～29)／広島・山陰方面(6・25～26)／福岡・北九州方面(7・12～13) *詳細はニュース94号掲載

7・21 7月例会(文化産業信用組合本部会議室)

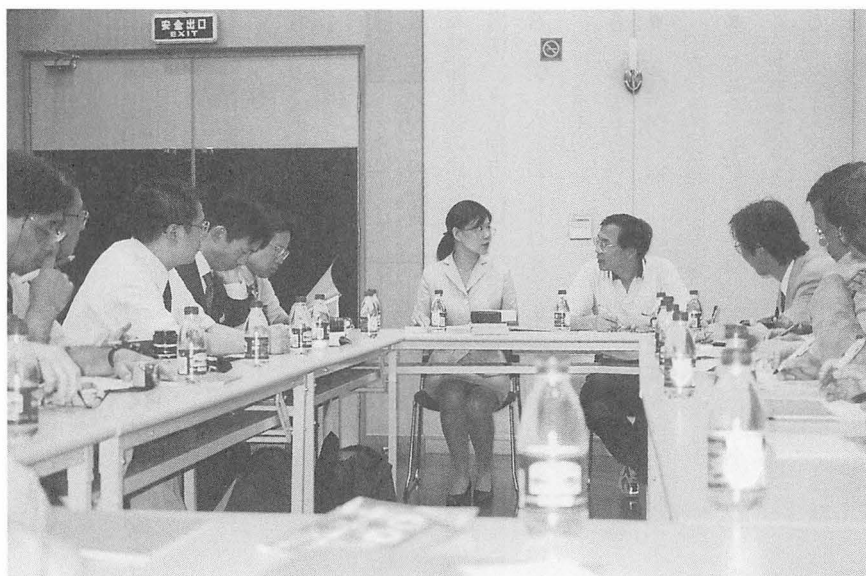
● 札幌市「コーチャンフォーミューヘン大橋店」出店の挨拶(日販北海道支店営業第二課長玉村武美氏)

● 和歌山「TUTTA WAYサン・パルク和歌山店(仮)」出店概要の説明(オー・エンターテイメント代表取締役大桑友朗氏・SP開発準備室高井孝治氏／

日販書籍仕入課長逸見氏・大阪支店係長久保昌弘氏)

● 北京国際図書展視察旅行に関する留意事項等の説明(近畿日本ツーリスト鈴木氏)

● ジュンク堂書店新宿店新規出店の説明会(人文・歴史合同)



上海書店店内での研修の一コマ

(ジュンク堂書店・岡専務・澤樹氏・大寺氏／大阪屋・上高牧取締役・仕入部秋山課長・東京営業部小西課長・峯岸係長)

8・18 8月例会(文化産業信用組合本部会議室)

● 大洋社図書館課岩城・菅間氏来会。「公共図書館への新刊見計い予約サービス」についての説明

9・2・9・6 北京国際図書館展視察旅行(北京・上海書店見学)(4泊5日)

第11回北京国際図書館展示会視察／北京図書大廈見学／王府井書店見学／上海書城見学／内山書店跡見学(旅行幹事・成田・田崎) *報告はニュース95号掲載

9・16 9月例会(出版クラブ会館)

9・22 「2005年人文社会科学系5団体合同新年会」打ち合わせ会(お茶の水「滝沢」)

出席・法経会、歴史書懇話会、日本大学出版部協会、国語・国文学出版会、人文会各代表者

10・20 10月例会(文化産業信用組合本部会議室)

● リプロ池袋店駒瀬店長来会。「人文会フェア」の要請と説明。

11・15 人文会ニュース94号刊行

11・19 11月例会(出版クラブ会館)

11・25 書店研修会

ブックマンズアカデミー大田店、ブックマンズアカデミー前橋店を見学の後研修。

○研修会出席者…文真堂書店（八木原常務・長井次長・黒沢課長・横田前橋店店長・江田大田店店長）／人文会（20社、26名）＊詳細はニュース96号掲載予定

11・26 鳥取県立図書館館長 齋藤明彦氏ミニ講演会（丸の内、岸本ビル会議室）＊講演内容は95号に掲載

12・16 リプロ池袋店人文会フェア関連企画トーク・セッション「開かれた〈人文書〉へ」（リプロ池袋店ミニティカレッジにて）

出席者…岩川哲司氏（筑摩書房）、羽鳥和芳氏（東京大

学出版会）、松井 純氏（平凡社）、尾方邦雄氏（みずず書房）／司会進行…西谷能英（未来社）＊詳細はニュース95号掲載

12・17 12月例会（出版クラブ会館）
（2005年）

1・19 1月例会（出版クラブ会館）

1・28 第28回人文・社会科学系 2005年出版五団体合同新年会合同新年会（ホテルメトロポリタンエドモント）当番幹事団体…人文会

以上
（書記幹事…新保卓夫）

人文会会員名簿

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学出版会内

2005 年 3 月末現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
青 木 書 店	古川 清	175-0092	板橋区赤塚 8-12-12	5997-4051	5967-7691
大 月 書 店	大和 定幸	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
勁 草 書 房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
慶應義塾大学出版会	小林 文生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
春 秋 社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草 思 社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑 摩 書 房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未 来 社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
有 斐 閣	(休会中)	101-0051	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
吉 川 弘 文 館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 大江治一郎
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保 卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会 ・企画グループ ◎浴野 英生・西谷 能英・華園 斉・小林 文生
 ・研修グループ ○田崎 洋幸・大和 定幸・吉武 創・古川 清
 ・図書館グループ ○杉田 啓三・段塚 省吾・馬場 正彦
 弘報委員会 ・弘報グループ ○佐藤 英明・島田 孝久・藤代 俊久・成田 共助
 ・ホームページグループ ◎鎌内 宣行・平川 恵一・江波戸 茂

青木書店

伊藤周平〔著〕

改革提言 介護保険

高齢者・障害者の権利保障に向けて
支援費制度(障害者福祉制度)との統
合案など、財政抑制の論理だけで進行
する介護保険「見直し論」を権利保障
という法的観点から精細に検証し、
政策提言を行う。【現代のテキスト】¥2310

東京都千代田区神田神保町1-60 税込
電話【03】3219-2341

●仲正昌樹「社会学論考の第四弾」医療・生命倫理における自己決定権とは
仲正昌樹著 AS変型二二六頁・二七三〇円(税込)

自己再想像のへ法——自己決定の狭間で
金沢大学附属病院での無断臨床試験をめぐる訴訟を考察する。
自由への権利と生命管理の間の矛盾を考察する。
〈法〉と〈法外なもの〉 仲正昌樹著 二七三〇円(税込)

ペンシオン・アレント、デリダをつなぐポスト・モダンの正義論へ
法の共同体 仲正昌樹著 二七三〇円(税込)

歴史と正義 ポスト・カント主義的「自由」をめぐる
史的構想力の回復に向けて 仲正昌樹著 二七三〇円(税込)

仲正昌樹「打出喜義・仁木恒夫著」AS判・九六頁・八四〇円(税込)
「人体実験」と患者の人格権 金沢大学付属病院無断
臨床試験訴訟をめぐる

御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp>

軍事組織とジェンダー

自衛隊の女性たち

佐藤文香著 自衛隊のジェンダー政策
の変遷を、現役自衛官へのフィールドワ
ークを交えて検証。 ●4200円

小山内薫 近代演劇を拓く

小山内富士著 日本近代演劇の先駆者
の人間的魅力を描く評伝。 ●3990円

善人ゲールハルト

王侯・騎士たち・市民たち

R.V.エムス著/平尾浩三編・訳 中世
独文学史上「商人」を初めて主人公
にした特異作の本邦初訳。 ●4725円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

ガリレオ裁判をめぐる物語

ローマのガリレオ

天才の栄光と破滅

46判・2940円(税込)

Wシアア/Mアルティガス著

浜林正夫・柴田知憲・訳

イタリアの誇る近代科学の父・ガリレオを、失意の晩年に
落とし込んだ有罪宣告にいたるまでを、事件にかかわった
数代のローマ教皇と中世イタリアの貴族・頭官の栄誉、野
心、失意、善意、策略の渦巻く歴史ドラマとして再現する

大月書店

東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
<http://www.otsukishoten.co.jp/>

..... シリーズ 愛書・探書・蔵書

まだ名前のない 小さな本

J・A・ミリャン 安藤哲行訳 「昔むかし」と「おしまい」というたった2行の小さな本の愉快な冒険譚。登場人物はすべて「本」、大人も子供も「本好き」必読! ■1680円

古書の聖地

ポール・コリンズ 中尾真理訳 住民1500人、古本屋40軒。世界中の愛書家が集う英国の田舎町に移り住んだ米国作家の日々。■2940円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03 (3255) 4501 価格は税込
<http://www.shobunsha.co.jp>

勁草書房

シリーズ言葉と社会

矢野道雄

星占いの文化交流史

星占いの起源と歴史を知っていますか? 「科学」としての占星術のグローバルな伝播を追う。2100円

宮原浩二郎

論 力 の 時 代

言葉の魅力の社会学 人の心を打つ言葉には秘密があった! 日常の言語感覚を研ぎ澄ます。1995円

東京都文京区水道2-1-1 * 価格税込
Tel 03-3814-6861 / Fax 03-3814-6854
<http://www.keisoshobo.co.jp>

回想法 高齢者の心理療法

黒川由紀子著 回想法の第一人者が、臨床心理学の視点から高齢者に対する回想法の理論と実際を解説。3150円

◎人生をプラスへ導くやり方を教えてくれる 論理療法による三分間セラピー

考え方しだいで、悩みが消える
M・R・エデルシュタイン他著/城戸善一監訳 人生は辛いや苦痛の連続だが、考え方しだいで良くなる。三分間のエクササイズで問題解決へ向かう。2520円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03(3946)5666 税込価格

話題の本

大澤真幸 現実の向こう

「歴史の終わり」の終わり

ドラマ「砂の器」の分析で戦後日本の構造を摘出、九一一以降の新時代に平和憲法の意義を再確認し、北朝鮮問題の解決策をも示唆。1890円

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6
電話03-3255-9611 (価格は税込)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

イデオロギーの呪縛から解放された
21世紀のマルクス像

▼全篇新訳

マルクス・コレクション

全7巻 監修=今村仁司・三島憲一
マルクスの予見どおり、近代世界は世界資本主義として完成しつつある。新たな読解をとおして蘇生をまつ、魅惑にみちたマルクスの精髓！ 四六判・上製カバー装 内容見本進呈

第1回・2冊同時発売

IV・V 資本論 第一巻 上・下

今村仁司・三島憲一・鈴木直訳 3360円/3675円

第2回 III 経済学批判要綱他 3月26日刊

サービスセンター **筑摩書房** 048-651-0053
*税込 <http://www.chikumashobo.co.jp/>

創元社

心の臨床家のための
改訂精神医学ハンドブック

小此木登良 深津千賀子 大野裕編 三六七五円
薬剤や少年犯罪等の話題を大幅加筆。2012年に完全対応。

短期遊戯療法入門

H.G.カドゥン C.E.シェーファー著/倉光修監修
短期で効果のある、現場の実情に即した技法。三九九〇円

虐待と非行臨床

橋本和明著 一六八〇円
虐待と非行の負の連鎖を、家裁調査官の目から解き明かす。

大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込価)
☎06-6231-9010 FAX06-6233-3111
東京都新宿区神楽坂☎03-3269-1051
<http://www.sogensha.co.jp/>

江戸の動物画 近世美術と文化の考古学
今橋理子 江戸時代の人びとは、動物に何を語らせようと
してさまざまな動物画を描いたのか、象徴・擬人化・地口(こ
とば遊び)の三つの視点から、主に兎・猪・子犬・昆虫が描か
れた作品を分析し、江戸文化の深層を探る。
A5判 三六六頁/一六三〇円

戦後日本の社会学 一つの同時代学史
富永健一 高田保馬・清水幾太郎から原純輔・盛山和夫ま
で戦後60年におよぶ社会学の主要著作を数十点取り上げ、
イベント・世代・学派をキイ・ワードにそれらの一つ一つと
対話を重ね、その到達点を明らかにする同時代学史。
A5判 四七二頁/一六五〇円

東京大学出版会 [価格]
税込

東京都文京区本郷 7-3-1 ☎03-3811-8814

証拠として通用する写真は
一枚もなかった!

「証拠写真」一四三枚
初の総括的検証
南京事件
証拠写真を
検証する
東中野修道ほか

影の長さや方向の測定など、あらゆる
方法で検証を加え、公開になった国民党
極秘文書を援用して戦時プロパガンダ
との驚くべき関係を明らかにする。公
正かつ画期的研究成果! 定価1575円

草思社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8 定価は税込価
☎03(3470)6565 <http://www.soshisha.com/>

◆夜回り先生のすべてがわかる！ 本物の感動が胸を打つ！

夜回り先生

卒業証書

冬来たりなば春遠からじ

水谷 修「著」

◇1366円

◆夜回り先生が一番読んで欲しい本

さよならが、いえなくて 助けて、哀しみから

水谷 修・生徒シヨン「著」

◇1260円

◎日本評論社 東京都豊島区南大塚3-12-4
http://www.nippyo.co.jp/ TEL:03-3987-8621 (価格税込)

美学イデオロギー

ポール・ド・マン 著 上野成利 訳

デリダの衣鉢を継ぎ、テクストの脱構築を徹底的に推し進めたイェール学派。その牽引者ド・マンが、文学テクストを超えて、カントやヘーゲル等の哲学テクストを分析の対象とした幻の主著。◎定価5040円(5%税込)

平凡社 〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
TEL 03-3818-0874 http://www.heibonsha.co.jp/

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

大落語 (上・下)

本邦初、世界でひとつのメタ落語。評論真つ青、小説も赤面、ジャズが馴染めるメタメタの怪傑作＝荻野アンナ。落語が新内にもジャズにも聴こえてくる。そして絵画のように、映画のように見えてくる＝田中優子。超絶イマジネーションによって落語の世界をアクロバティックに拡張する待望の革命的落語論。各2415円

『ビルマの豎琴』をめぐる戦後史

馬場公彦著 竹山道雄の主著と評論を丹念に追って、その思想を知識人による戦争責任の議論の中に位置づけなおし、アジア・西欧諸国と日本をめぐる真の「和解」の可能性について考察する。2310円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

知識ではなく、未知なる愉悅へ。

哲学の現代を読む！

酒井 健

バタイユ 魅惑する思想

ダイレクトにテクストを引用、読解、解説するプロレスで思想の妙味へ耽溺しよう。「概説」を超え、「堪能すること」をめざす新しい思想書シリーズの誕生！

◎定価2310円 ISBN 4-560-02451-0

続刊▼メルロ＝ポンティ(加賀野井秀二)／フーコー(栗原仁)／デリダ(廣瀬浩司)／フランシヨ(守中高明)／ジャン＝リュック・ナンシー(澤田直)／他

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.3291-7811 / fax.3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp *価格は税込